

七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係

山崎 信二

1. はじめに
2. 忍冬唐草文軒平瓦について－百済的なものと新羅的なもの－
3. 湖東式軒瓦について－高句麗的なもの－
4. 檜原廃寺式軒瓦について－新羅的なもの－
5. おわりに

要旨 論文の主要な点は、日本の7世紀代の瓦は百済との関係が強いが、とりわけ法隆寺の瓦において百済人との関係が強いことが指摘できること。また、7世紀中葉の百済王子の日本渡来によって、百済大寺の造営が進められ、百済からの旧来の渡来人で、倭漢氏の支族であった人々が、百済王族をとり囲む形で集住しはじめること。百済滅亡後において、百済王子を難波に配して日本国内における百済国の王としたが、これは法隆寺と密接な関係があること。法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦を分類し編年すると、これらの瓦を出土する寺院のほとんどすべてにおいて百済人との関係が指摘できることである。一方、日本の7世紀末の軒平瓦で紀伊上野廃寺・伯耆斎尾廃寺などの独特の忍冬文を用いる軒平瓦があり、この軒平瓦は包み込み式の新羅式の作りであり、主として7世紀に新羅から日本に渡来した人々の寺で主に用いられたことを指摘した。そして、6・7世紀の新羅軒丸瓦の編年を行ない、檜原廃寺の瓦においては、650年頃と、670年から680年頃までの二回にわたって新羅との関係を有する瓦があったことを述べた。最後に、高句麗的なものとして、湖東式軒丸瓦・軒平瓦について述べ、粘土紐桶巻作り、軒丸瓦瓦当裏面の丸瓦接合のための刻み、瓦当面の中房の突出と蓮弁の盛り上がりの点において、湖東式軒瓦を生み出したのは高句麗からの亡命者であることを述べた。

キーワード 法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦と百済 紀伊上野廃寺式忍冬唐草文軒平瓦と新羅 湖東式軒瓦と高句麗

1. はじめに

私は、1983年3月に「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」¹という論文を書いたのであるが、英文テーマは当時の編集者田中琢・佐原真両先生によって、6・7世紀における横穴式石室と初期仏教寺院と朝鮮からの渡来人との関係と訳された。その後、私は藤原宮式の瓦を除けば、7世紀の瓦について論考を全く書くことはなかった。

ところが、2003年4月に飛鳥藤原宮跡発掘調査部に転勤してからは事情が異なってきた。1つ目は、古代瓦研究会の代表を毛利光俊彦氏から要請されて受けることになり、「川原寺式軒瓦の成立と展開 (1) (2)」(2003年・2004年)^{2・3}、「法隆寺式軒瓦の成立と展開」(2005年)⁴、「雷文縁・輻線文縁・重圏文縁の複弁蓮華文軒丸瓦の展開」(2006年)⁵、「重弁蓮華文軒丸瓦の展開」(2007年)⁶と、5回連続で司会を行ったことである。司会を行なう前に、これまでに発表された論文を読み、資料収集を行なったために、それぞれのテーマについて、私なりに独自の考えが生じてきた。

2つ目は、藤原転勤と共に、韓国国立文化財研究所との共同研究の窓口・実務責任者になったことである。そのため、2004年に新羅王京の瓦、2005年に慶州仁旺洞の瓦、慶州天官寺の瓦などを国立慶州文化財研究所において実見することができた。

一方、科学研究費のテーマである「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」(2005～2008年)の、2006年度からの研究代表を、これも毛利光氏から要請されて受けることになった。このため、2006年に風納土城の瓦、皇龍寺の瓦を実見することができた。このようにして1983年当時の論文作成時には実見しなかった韓国の瓦を、今回親しく実見・拓本・実測する機会を得たのである。

このように自らの積極的な意志ではないが、まわりの方々の段どりによって再び7世紀の瓦についての資料が私のファイルに増加しはじめたのである。このような時に、日韓文化財論集が提案された。韓国との共同研究の窓口・実務責任者として当然、論文を書くべき立場に立たされた訳である。かくして、論文作成を前提としての調査旅行を韓国国立文化財研究所の段どりでおこなうことになり、2006年に帝釈寺の瓦(国立全州および公州博物館所蔵)、中原塔坪里寺址の瓦(国立清州博物館所蔵)を実見することができた。さあ、後は論文を書くだけである。

以下で論じるのは、主として「法隆寺式軒瓦の成立と展開」および「重弁蓮華文軒丸瓦の展開」の司会に際して、私独自の見解が生じて来た内容を基本とし、比較資料として2004年から2006年までの韓国での瓦調査の成果を随所に散りばめながら、共同研究の責任の一端をにないたいと思う。

2. 忍冬唐草文軒平瓦について－百済的なものと新羅的なもの－

日本の7世紀末の軒平瓦で法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦と呼ぶべき一群がある。この軒平瓦は日本式の作りであり、主として6世紀後半から7世紀前半に百済から日本に渡来した、古い百済系の渡来人の寺で主に用いられた。

一方、日本の7世紀末の軒平瓦で紀伊上野廃寺・伯耆斎尾廃寺などの独特の忍冬文を用いる軒平瓦がある。この軒平瓦は包み込み式の新羅式の作りであり、主として7世紀に新羅から日本に渡来した人々の寺で主に用いられた、というのがこの章の要点である。

最後に韓国側の資料として、統一新羅の忍冬文軒平瓦、帝釈寺の忍冬文軒平瓦、中原塔坪里寺址の忍冬文軒平瓦について述べる。

A. 法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦

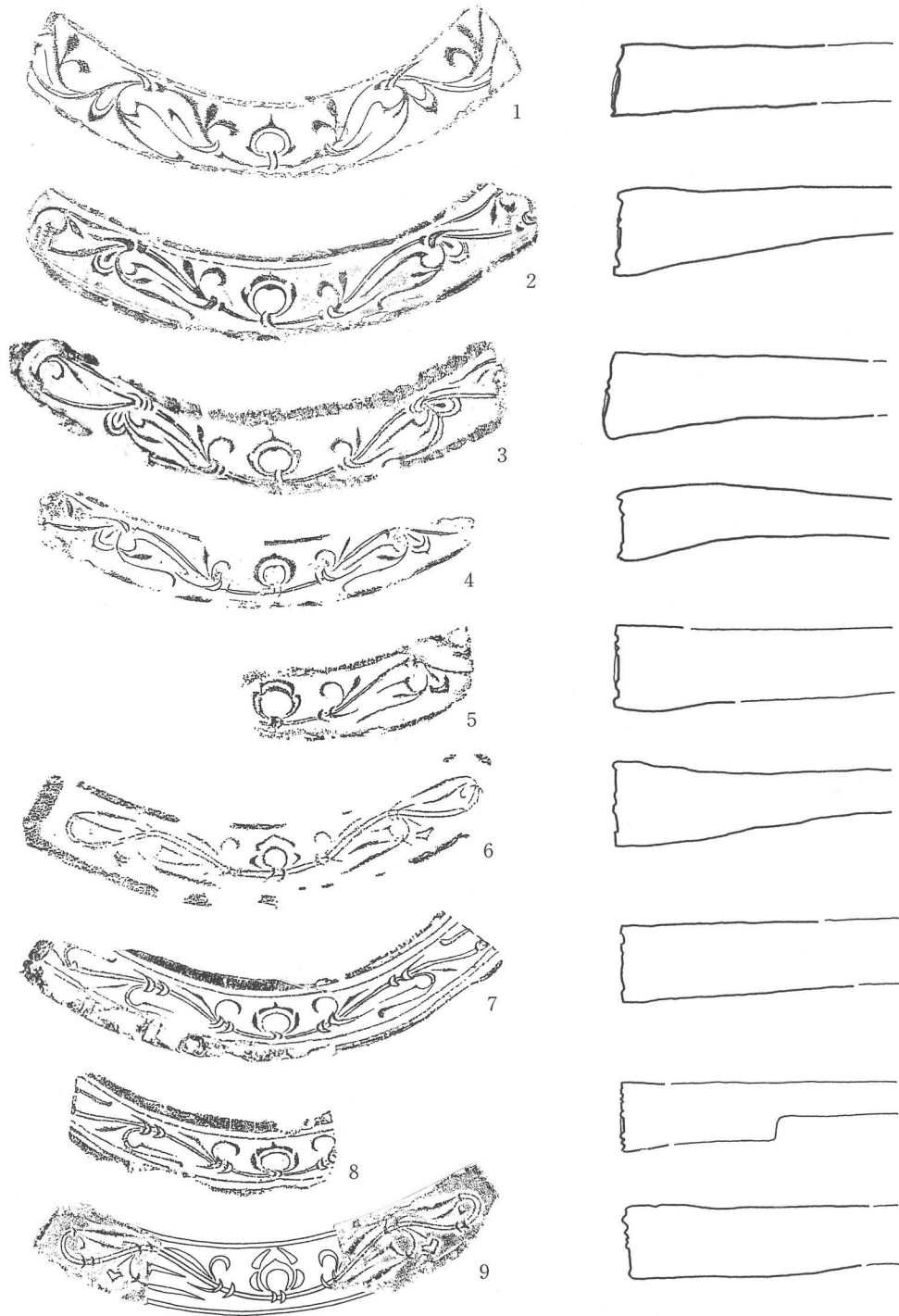
法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦の特徴については、次の3つの項目をあげることができる。

- ① 全体の文様としては、「中央の宝珠形の中心飾りの左右に忍冬唐草文をだいたい3回反転させたもの」⁷⁾。
- ② 中心飾りとしては、中央に外廓が宝珠形の中心飾りをつけ、中心飾りの内廓は丸いもの(A)、内廓の外廓が丸く内側だけがハート形のもの(B)、内廓の文様全体がハート形のもの(C～F)がある。さらに細分すると、内廓と外廓の文様の間に、遊線がないもの(A～C)、右側のみ(D)又は左側のみ(E)に遊線があるもの、両側にあるもの(F)などがある。
- ③ 唐草文の特徴として、唐草文の主葉(莖)は2本線で描き、結節部を作ってそこから枝葉を派生させるものである。

唐草文の展開をやや細かく描くと、第1単位と第2単位の結節部では、強い曲線・ゆるやかな曲線の枝葉を3本程配するが、第2単位では一方に蕾を配するものと配さないものとの差があり、他方では3本の枝葉のうち最も巻きの強い曲線の先端付近から新たに4本目のゆるやかな曲線の枝葉を派生させている。

この2本の曲線の組み合わせからなる複合曲線こそが、法隆寺式軒平瓦の最大の特徴であり、その祖型(法隆寺東院下層出土215A)においては、第1単位から長くゆるやかにのびる曲線と、第2単位の短くて巻きの強い曲線の先端が文様の配列上、たまたま接していたものが、次の法隆寺西院創建期においては(216A)強固に結合されたものとして、一本の枝葉を分離・分割せしめ、複合曲線なるものを生み出しているのである。即ち、この文様は法隆寺の軒平瓦においてのみ初期の展開の仕方が追えるのであり、法隆寺の工房とでもいふべき空間で派生した文様なのである。

これを中心飾りの判別できるもので、全国の法隆寺式忍冬文軒平瓦を分類すると次のよ



第1図 法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦 (1:5)

法隆寺 (1・2) 平隆寺 (3) 山村麿寺 (4) 新部大寺 (5) 下太田麿寺 (6) 繁昌麿寺 (7) 吸谷麿寺 (8) 仲村麿寺 (9)

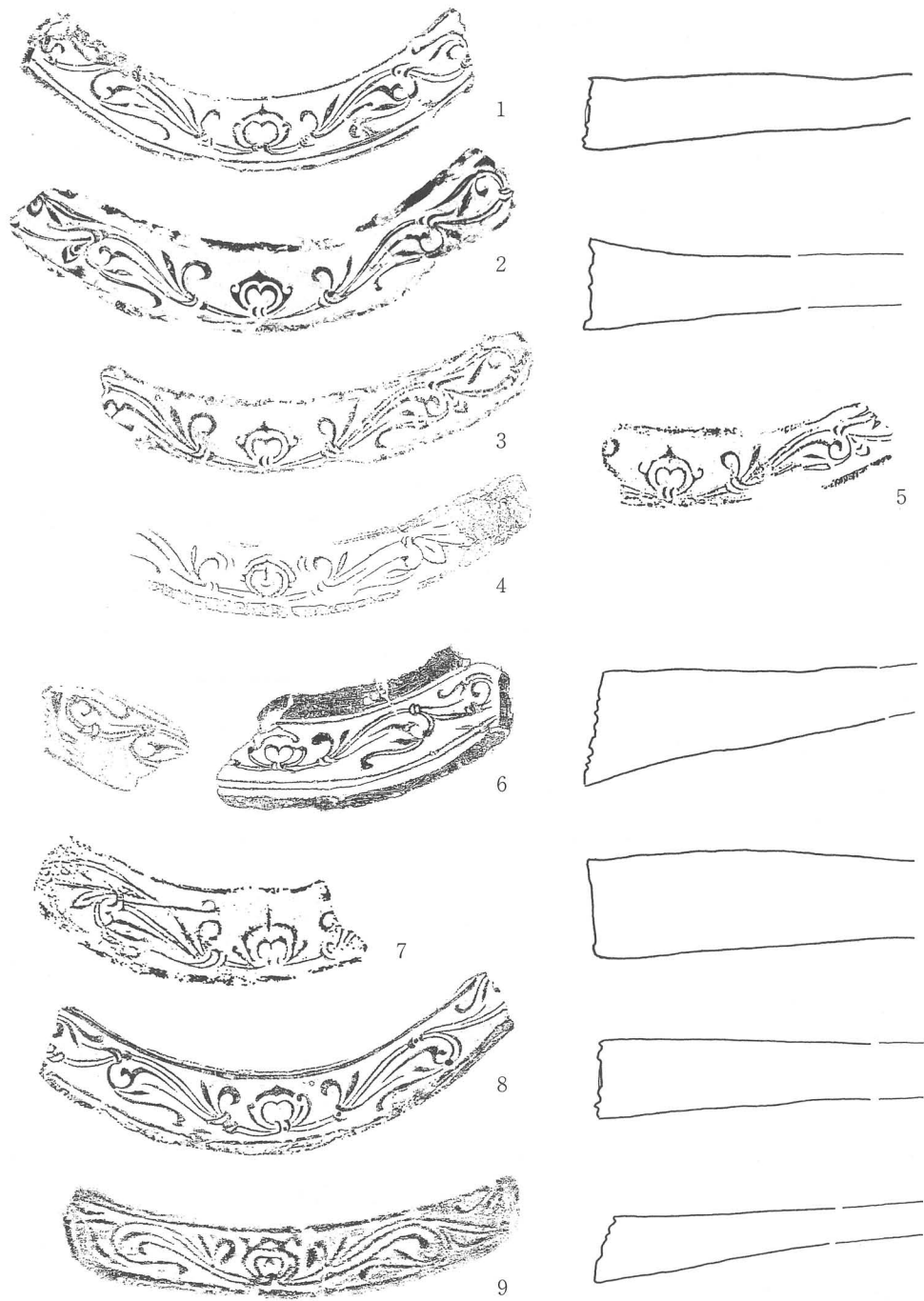
うになる（なお、*印は唐草文第2単位に蕾のあるものである）。

- ① 中心飾りの内廓が丸いもの（A）と、内廓の外側が丸く内側だけがハート形のもの（B）
 法隆寺215A⁸（*第1図1）、法隆寺216A⁸（*第1図2）、平隆寺例⁹（*第1図3）、山村廃寺例¹⁰（*第1図4）、播磨新部大寺例¹¹（*第1図5）、播磨下太田廃寺例¹²（*第1図6）、播磨繁昌廃寺例¹³（第1図7）・吸谷廃寺例¹⁴（第1図8）、讃岐仲村廃寺例¹⁵（*第1図9）
- ② 内廓の文様全体がハート形のもの、遊線はない（C）
 法隆寺216B⁸（第2図1）、法輪寺216D¹⁶（*第2図2）、近江樋ノ口瓦窯例¹⁷（*第2図3）、伊賀三田廃寺例¹⁸（*第2図5）、摂津細工谷瓦窯例¹⁹、摂津芦屋廃寺例²⁰（*第2図4）、土佐比江廃寺例²¹（*第2図7）
- ③ 内廓の文様全体がハート形のもので、右側のみ遊線があるもの（D）
 法隆寺216C⁸（第2図8）、摂津太田廃寺例²²（第2図9）
- ④ 内廓の文様全体がハート形のもので、左側のみ遊線があるもの（E）
 河内洪川廃寺例²³（第3図1）
- ⑤ 内廓の文様全体がハート形のもので、左右両側に遊線があるもの（F）
 法隆寺218A⁸（第3図2）、中宮寺218B¹⁶（第3図3）、法起寺217C¹⁶（第3図4）、額安寺例¹⁶（第3図5）
- ⑥ 内廓の文様全体がハート形のもので、左右両側に横方向の二本の遊線があるもの
 豊前虚空蔵寺例²⁴（*第3図6）

まず、①について述べよう。法隆寺215Aは、法隆寺式軒平瓦の祖型であり、範型を用いる最初の軒平瓦で、7世紀中頃の年代である。

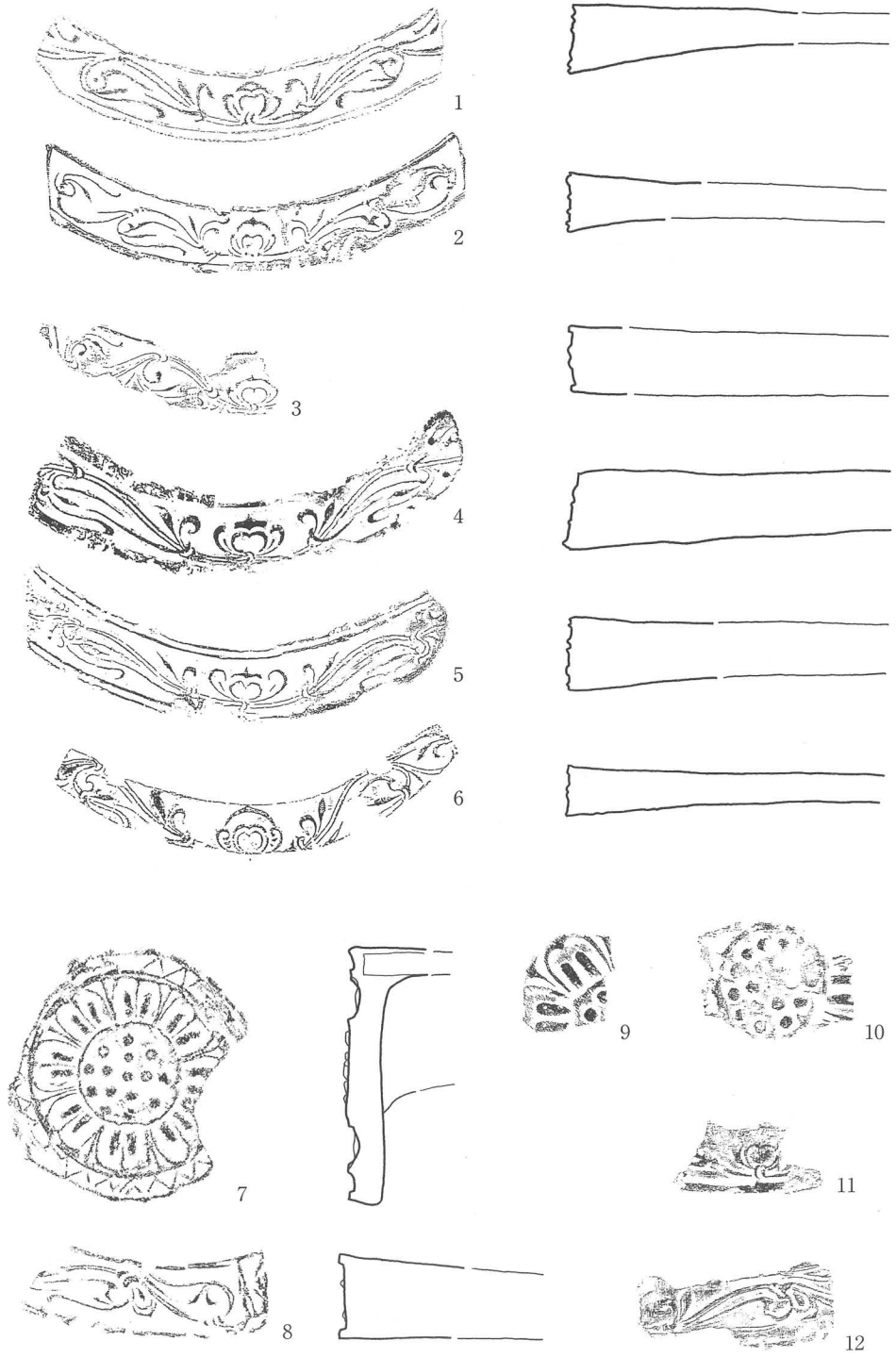
次に法隆寺216Aは、法隆寺西院伽藍の金堂・塔創建瓦である。その実年代は、天智八年（669）の、「是の冬に、斑鳩寺に災けり」、天智九年（670）の夏四月に、「法隆寺に災けり、一屋も餘ることなし」（『日本書紀』）、以後に製作された軒平瓦であるから、上限を675年頃と考えてよいだろう。

Bグループの中では、法隆寺216Aと平隆寺例との前後関係が微妙であり、他は法隆寺216A以後のものともみて誤りない。平隆寺例との比較では、右側第2単位の「複合曲線」は、平隆寺例が硬化しており、平隆寺例から法隆寺216Aへの影響はありえず、やはり法隆寺216Aが先行するとみてよい。山村廃寺例も、法隆寺216Aの模倣であろう。播磨新部大寺例も法隆寺216Aの模倣だが、山村廃寺例より模倣の仕方がよくない。播磨下太田廃寺例は播磨新部大寺例の模倣であり、蕾の形骸化、結節部の形骸化など、かなり年代の降るものと考えてよい。讃岐仲村廃寺例は播磨下太田廃寺例の模倣であろう。なお、播磨繁昌・吸谷廃寺例は蕾を持たないが、播磨新部大寺例の模倣であろう。



第2図 法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦 (1:5)

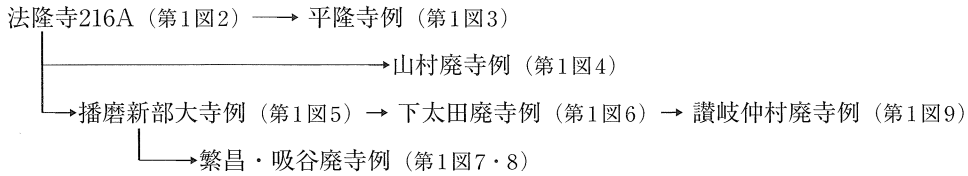
法隆寺 (1・8) 法輪寺 (2) 樋ノ口瓦窯 (3) 芦屋廃寺 (4) 三田廃寺 (5) 細工谷瓦窯 (6) 比江廃寺 (7) 太田廃寺 (9)



第3図 法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦ほか (1:5)

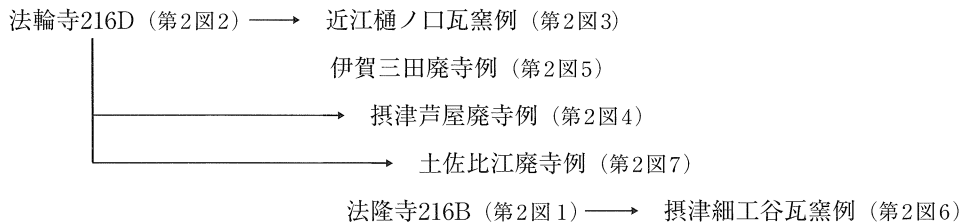
洪川庵寺 (1) 法隆寺 (2) 中宮寺 (3) 法起寺 (4) 額安寺 (5) 虚空蔵寺 (6) 堂ヶ芝庵寺 (7・8) 勝山南遺跡 (9~12)

以上をまとめれば、次のようになる。



法隆寺216Aの年代の上限が675年頃として、讃岐仲村廃寺例は組み合う軒丸瓦の文様構成および断面形にみられる文様の平坦さからみて、藤原宮期併行とみてよかろう。即ち、これらの諸形態は675年頃から700年頃までに製作されたものと想定できる。

②のグループについては、法隆寺216Bに蓄はないのに、他の5例には蓄があるから、216Bは祖型とはなりえず、法輪寺216Dが祖型であることは明らかである。法輪寺216Dに酷似するのは近江樋ノ口瓦窯例と伊賀三田廃寺例で、法輪寺例とかなり近接した年代にあるとみてよいだろう。摂津芦屋廃寺例は、必ずしも法輪寺例の直接の模倣とは言えないが、文様自体はかなりしっかりしていると言ってよい。摂津細工谷瓦窯例は唐草文第2単位に蓄がないので、法隆寺216Bを模倣したものと考えられる。土佐比江廃寺例は、法輪寺216Dの影響下に生まれたものとしてよかろう。以上をまとめると次のようになる。



法輪寺については『上宮聖徳太子伝補闕記』に、「斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地。故百濟入師率衆人、合造三井寺」とあって、石田茂作氏は「法輪寺忍冬文こそ」「基本形態」で、「法輪寺建築に於いて先づ使用された」²⁵と論じたことがある。

そこで法輪寺216Dと法隆寺216Aとの比較が必要になってくるが、法輪寺216Dの唐草文第2単位の「複合曲線」は、法隆寺216Aのような微妙な形態ではなく、216B・Cのように定型化しているのが注意される。したがって、法隆寺216Aと法輪寺216Dとが同じ頃に出現したとみることは可能だが、まず法輪寺で「此の忍冬文宇瓦を先づ試用し」「使用され」、「それが好評であった為法隆寺再興に大々的に使用した」²⁵とみることはできないと思う。

法輪寺216Dの年代は、法隆寺216Aの創建年代に近い670年代の後半と考えてよいだろう。そして、最後の摂津細工谷瓦窯例は、やはり藤原宮期併行とみてよいだろう。

③のグループは、中心飾りに右側のみ遊線のある法隆寺216Cと摂津太田廃寺例の2例である。法隆寺216Cは、西院伽藍の創建期の瓦であるが、組み合う軒丸瓦は法隆寺37Bで、文

様が平坦なことからみて、どんなに遡っても天武朝であろう。摂津太田廃寺軒平瓦は、きわめて稚拙な文様である。しかし法隆寺軒丸瓦37Bと摂津太田廃寺軒丸瓦とが同範で、組み合う軒平瓦の中心飾りに右側のみ遊線のあるのは、法隆寺216Cと摂津太田廃寺例との2例しか日本では存在しないことは注目してよい。法隆寺37Bは範傷進行から5段階に追えるが、摂津太田廃寺例は範傷が2段階目の比較的初期のものである。

④の左側のみ遊線のあるものは河内洪川廃寺の1例のみであり、それは右側のみ遊線がある法隆寺216Cの文様を表裏反転したものと考えることもできる。

⑤のグループの左右両側に遊線があるものは法隆寺218Aなどであり、218Aは西院伽藍の創建瓦で、軒丸瓦37Daと組む可能性が指摘されている。中宮寺の218B、法起寺の217Cおよび額安寺例もほぼ同時期のものと考えられる。法起寺出土の217Cについては、『聖徳太子伝私記』所収の岡本寺の項に「法起寺塔露盤銘文」²⁶があり、それには乙酉年（685）に恵施僧正が堂塔を構立し、丙午年（706）の三月に露盤を営み作るとあることから、700年頃の年代としてよかろう。⑤のグループの瓦全体の年代が、ほぼ藤原宮期にあるとみてよいであろう。

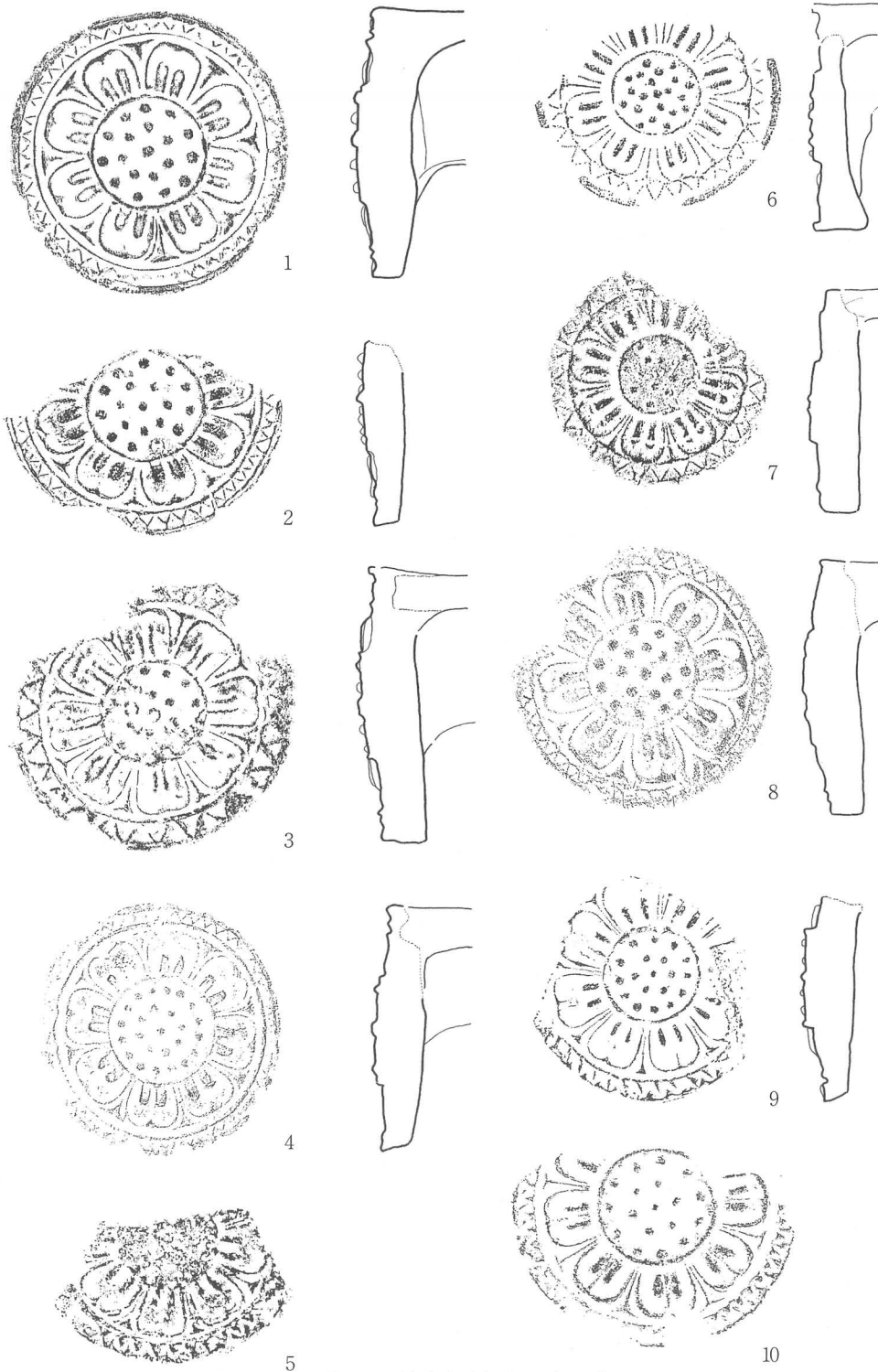
次に⑥の豊前虚空蔵寺例について、藤原宮期とみることもできるが、一方、和銅六年（713）以降とみる見解もある²⁴。

以上が法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦の実年代である。

B. 法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦と組む軒丸瓦（法隆寺式軒丸瓦）

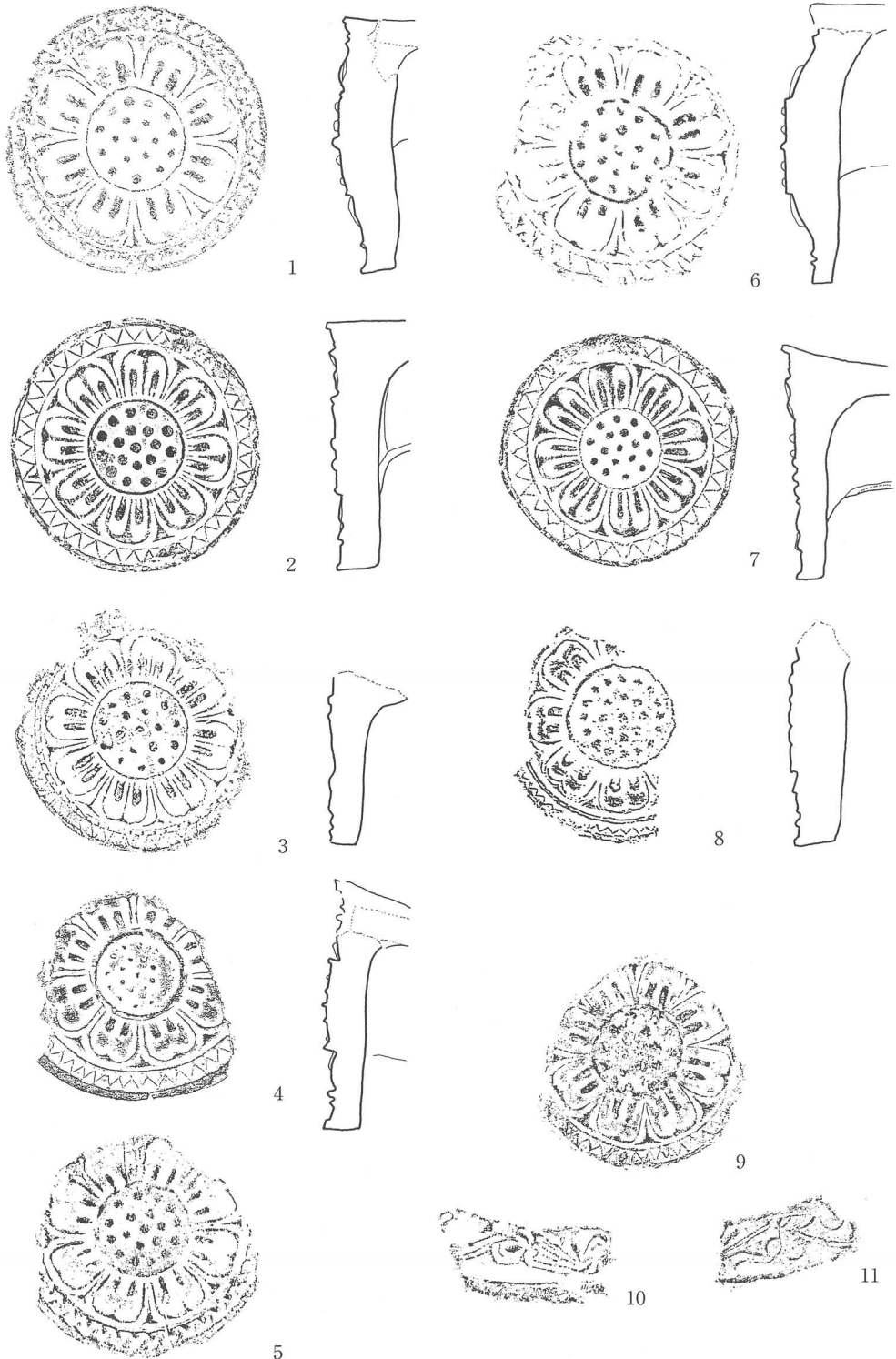
中心飾りの外側が丸い文様をもつ軒平瓦（①のグループ）において、まず法隆寺216Aは軒丸瓦37A（蓮子1+7+11）と組む（第4図1）。線鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦。播磨新部大寺例は組む軒丸瓦が不明だが、下太田廃寺（第4図6）・仲村廃寺（第4図7）は線鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦と組む（前者の蓮子は1+4+8、後者の蓮子は1+7+8）。一方、繁昌廃寺は単弁蓮華文軒丸瓦と組むようである。なお、法隆寺軒丸瓦37Aの範型は四国へ流出し、阿波西原瓦窯で軒丸瓦が焼成（第4図2）される。次に、平隆寺の軒平瓦は面違鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦（蓮子1+6+12：第4図3）と組み、軒丸・軒平瓦のセットは伊予中ノ子廃寺・朝生田廃寺にもあるとされる。しかし伊予の同範軒瓦は、じつは大和の平隆寺に近接する瓦窯で出土した多数の軒瓦を柳原多美男氏が大和の骨董屋・収集家から入手して、それを伊予で出土したと主張したにすぎない、と私は考えている。一方、山村廃寺の軒平瓦は、線鋸齒文縁有子葉単弁蓮華文軒丸瓦と組み合う。

中心飾りがハート形のもので遊線のない軒平瓦（②のグループ）において、まず法輪寺216Dは複弁蓮華文軒丸瓦（法隆寺37E：第4図4）（蓮子1+8+16）と主として組み合い、古式の法隆寺37Aと同範の軒丸瓦（第4図8）が補足瓦として組むとされる。一方、近江樋ノ口瓦窯軒平瓦は、手原廃寺（第4図5）や東光寺跡出土例からみて面違鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦（蓮子1+6+12）と組み、伊賀三田廃寺でも面違鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦（第4図9：蓮子1+



第4図 法隆寺式軒丸瓦 (1:5)

法隆寺 (1) 西原瓦窯 (2) 平隆寺 (3) 法輪寺 (4・8) 手原廃寺 (5) 下太田廃寺 (6) 仲村廃寺 (7) 三田廃寺 (9) 芦屋廃寺 (10)



第5図 法隆寺式軒丸瓦など (1:5)

長林寺 (1) 法隆寺 (2・7) 中宮寺 (3) 額安寺 (4) 東光寺跡 (5) 西琳寺 (6) 法起寺 (8) 益須寺 (9~11)

6+12)と組むとみてよい。さらに摂津芦屋廃寺でも、面違鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦(第4図10:蓮子1+6+11)と組む。以上軒丸・軒平瓦をセットとしてみると、近江樋ノ口瓦窯例・伊賀三田廃寺例・摂津芦屋廃寺例は(あるいは長林寺・西琳寺例も含むか)、面違鋸歯文縁や中房蓮子の配置から軒丸瓦は平隆寺例に酷似する一方で、軒平瓦の方は法輪寺例に酷似することがわかる。

次に中心飾りの右側のみ遊線のある軒平瓦(③のグループ)については、法隆寺216C、摂津太田廃寺例とも軒丸瓦が37B(第5図2)と組み合わせ、同範であることは先述した。中心飾りの左右両側に遊線のある軒平瓦(⑤のグループ)においては、まず法隆寺218Aは線鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦37Da(第5図7:蓮子1+6+10)と組むとされ、中宮寺では線鋸歯文・珠文縁複弁蓮華文軒丸瓦53A(第5図3:蓮子1+6+11)と組み、法起寺では線鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦37F(第5図8:蓮子1+8+16)と組むようである。額安寺でも線鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦(第5図4)と組む。グループ⑤については、線鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦と組む傾向が強く、中宮寺例では珠文縁まで加わり、藤原宮の軒丸瓦と同一の特徴を持つようになってきている。

以上述べてきたことを軒丸・軒平瓦を組み合わせて年代を考えると次のようになる。

- (1) 軒平瓦の祖型は、斑鳩寺又は法隆寺東院下層の軒平瓦216Aであり、7世紀中葉の年代である。
- (2) 法隆寺金堂のセットをなす軒瓦の組み合わせ37A-216Aが、やはり法隆寺式軒瓦のセットとしては最古であり、その年代は675年前後である。軒丸瓦の断面にみえる中房が円形に突出する特徴をもつ。
- (3) 次に古いのが、平隆寺例・法輪寺例・近江樋ノ口瓦窯例・伊賀三田廃寺例・摂津芦屋廃寺例であり、法輪寺を除けば軒丸瓦は面違鋸歯文縁で、軒丸瓦の断面にみられる中房がまだ円形に突出する特徴を保っている。これらの諸例と山村廃寺例が670年代後半以降の天武朝(672~686)の瓦であろう。
- (4) 本論で述べた残りの軒丸瓦・軒平瓦は持統朝・文武朝の年代のもので、ほぼ藤原宮の時期と併行する年代にある。軒丸瓦の断面は平坦で、軒平瓦文様は形式化している。

C. 法隆寺式軒瓦がなぜ百済と関係があるのか

① 法隆寺の創建と再建

法隆寺の創建と再建時の造営主体については必ずしも明らかではない。創建については、聖徳太子による造営と、太子追善のための造営との説があり、再建についてはさらに不明な点が多い。そこでまず、仏像光背などに記される具体的な人物名をあげ、そこから造営主体と工人を考えることとし、天皇と聖徳太子を除く人名をあげると次の三例がある。

A. 癸未年(推古三十一年:623)銘の釈迦三尊像²⁷には、司馬鞍首止利仏師が造ること

を記す。

- B. 法隆寺金堂の広目天像光背²⁷に、「山口大口費、上而、次、木閉二人作 也」と記す。書紀の白雉元年（650）の「是歳、漢山口直大口、詔を奉りて千仏の像を刻る」に対応するものとみられる。
- C. 法隆寺の銅板造像記一枚²⁷には「甲午年三月十八日、鴈大寺の徳聡法師、片岡王寺の令弁法師、飛鳥寺の弁聡法師ら三僧、所生の父母の恩に報いむがため、敬みて觀世音菩薩像を奉る」とし、この三僧に共通する「族は大原博士、百濟に在りては王、此の土にては王姓」と記す。甲午年は、持統八年（694）とするのが定説である。

この光背銘の銘文、それぞれに対応する年代において、法隆寺の軒平瓦には注目すべき次のような特徴がある。

Aの年代に近いもの：法隆寺の手彫り忍冬唐草文軒平瓦。法隆寺例では切り抜きの型紙状のものを小さな針で粘土瓦当にとめて、工具で忍冬唐草文を彫り込む。一方、坂田寺ではフリーハンドで工具を用いて忍冬唐草文軒平瓦を彫り込む。手彫り忍冬唐草文軒平瓦は坂田寺と法隆寺にしかない。坂田寺は倭漢氏支族である鞍作村主の氏寺であり、そのうち鳥仏師は仏工として有名であり、またAの光背にも止利仏師と銘文を刻む。

Bの年代に近いもの：法隆寺の型押し忍冬唐草文軒平瓦。法隆寺では213A、213Bの2種の型押し軒平瓦があり、百濟大寺と考えられる吉備池廢寺では法隆寺213Bの型押しを用いて軒平瓦を製作する。吉備池廢寺の方が範傷が進行しており、法隆寺用の型押し具を使ったことがわかる。吉備池廢寺・百濟大寺の造営長官は舒明十一年紀（639年）では、倭漢氏である書直縣である。

Cの年代に近く、法隆寺再建当初のもの：法隆寺西院創建軒瓦は37A-216Aの組み合わせが金堂所用瓦であり、そのうち軒丸瓦37Aの範型が後に四国へ流出し阿波西原瓦窯で焼かれ、また軒平瓦216Aについては摂津堂ヶ芝廢寺例と同範であろうと考えられてきた。一方、最近の発掘成果によると、摂津勝山南遺跡でも、法隆寺216Aと同範の軒平瓦が出土し、法隆寺37Aに文様が酷似する軒丸瓦が（これはどうも別範らしい）出土している。

1996年に藤澤一夫氏は「摂津百濟寺考」²⁸において「堂ヶ芝町」の寺跡が、百濟寺に当たると確言している。堂ヶ芝廢寺のすぐ北側には細工谷遺跡があり、「百濟尼」「尼寺」と記された墨書土器が出土し、この遺跡が百濟尼寺と考えられている¹⁹。一方、堂ヶ芝廢寺から南へ約800mの勝山南遺跡では、先述の法隆寺216Aと同範の軒平瓦が出土し、軒丸瓦も37Aにきわめて酷似していることが明らかになっている²⁹。

この堂ヶ芝廢寺・細工谷遺跡・勝山南遺跡の場所は「摂津百濟寺」「摂津百濟尼寺」等の地であり、その造営氏族は、天智三年（664）三月紀の「百濟王善光王等を以て、難波に居らしむ」からみて、百濟王善光と考えられる。ここでCの法隆寺銅板造像記に記す大原博士

が百済王氏であることが注目される。善光（禪広）は舒明朝に豊璋と共に来日し、父義慈王が唐に敗れた時、豊璋は百済に帰り、善光は日本にとどまる。善光の子、昌成は幼年に父に随って来日した。かつて、平子鐸嶺は「この昌等より分れて百済王の大原史はいでたる可し」³⁰と論じたが、このように、法隆寺西院創建軒平瓦216Aは、百済王族との関係が濃厚であるとみてよいのではないだろうか。

さらに、この「撰津百済寺」の場所は、日本にとって次のような重要な場所であった可能性が高い。即ち、利光三津夫氏は「百済亡命政権考」³¹において、善光をして難波に居らしむという天智三年の記事は、「日本における百済亡命政権の樹立を述べたものではないかと思う。何とならば、難波は大和朝廷が海外に通ずる門戸であって」、「この由緒の地難波に善光を居らしめたことは、観念的には善光を百済に居らしめたこととなり、ここに天智三年紀の記事には、日本国内に百済国を建設するという意味が秘められていると解せられる」³¹としている。

以上、Cの段階で百済と密接な関係があることが判明したが、A・Bの段階での法隆寺と百済との関係はどうであろうか。

まず、Aの段階として司馬鞍首止利仏師がいる。彼の一族は初期仏教史の開拓者として描かれ、祖父司馬達等は百済から招来した仏像に関係して描かれ、父の多須奈は用明紀において天皇の奉為に出家して修道し丈六の仏像及び寺を造り奉らむことを請ひ、姨の嶋女は、善信尼と呼ばれ、崇峻元年に百済に留学して戒律を受けている。そして、『扶桑略記』では、祖父達等は「大唐漢人」と書き、父は「百済仏工鞍部多須奈」と書くが、日本の初期仏教が百済から導入されたのであるから、仏教方面における蘇我氏の補佐役としての鞍作氏が百済と密接な関係にあるのは、当然のことと言わなければならない。

次にBの段階の山口大口費であるが、彼も倭漢氏支族であり、『新撰姓氏録』右京諸藩上に、「山口宿禰 坂上大宿禰同祖。都賀直四世孫都黄直之後也」とあり、百済との具体的な関係はわからない。しかし、この時期、法隆寺用の型押し具を用いて百済大寺の軒瓦を製作したことは注意しておかねばならない。

以上からみるとA・Bの時期には、法隆寺の軒平瓦は倭漢氏一族の鞍作氏・山口直氏および本宗家と密接な関係があり、Cの時期には百済王族との密接な関係があることになる。

そこでCの時期に関係があるとみられる百済王族の大原史の出自を『新撰姓氏録』³²で抜き出してみると、「漢」と書いたり「百済」と書いたり、やや混乱があるように見える。

左京諸藩上 漢 大原史。漢の人、西姓令貴自り出づ。

右京諸藩下 百済 大原史。漢の人、木姓阿留素西姓令貴自り出づ。

撰津諸藩 漢 大原史。漢の人、西姓令貴自り出づ。

しかしこれは混乱というより、ある種の特殊な事情を反映しているのではないだろうか。

舒明朝三年（631）に、百済王子の豊璋・善光が日本に渡来したとされ、舒明十一年から皇極元年頃に百済大寺が造営された。百済からの旧来の渡来人で、倭漢氏の支族であった人々は、百済王族をとり囲む形で集住しはじめる。その最も大きな核は百済大寺であろうが、他の一つの核が法隆寺であり、別の一つは摂津であろう（650年頃は四天王寺が核ではなかろうか）。斉明六年（660）百済が滅亡し、王子豊璋を呼び返して国王とするが、天智二年（663）豊璋は高句麗に逃亡する。一方、弟の善光は日本にとどまっていたが、天智三年（664）三月、日本国内に居住する百済国王として難波の「摂津百済寺」隣接地に移動する。この王家本流は、皇親、藤原、丹比、大伴等と同等の優遇を受け、その後百済王敬福へとつながるのであるが、一方王家支流の大原氏は8世紀代を通して次第に百済からの旧来の渡来人の中に同化していくのであろう。

② 百済人と日佐氏・紀臣同族

法隆寺式軒瓦最古の組合せは法隆寺西院金堂所用瓦37A-216Aであるが、次に古いグループとして、平隆寺例・法輪寺例・近江手原廃寺例（近江樋ノ口瓦窯例）・伊賀三田廃寺例・摂津芦屋廃寺例を先述したが、この他に軒丸瓦を主体にしてみると古式のものとして大和長林寺（第5図1）・河内西琳寺（第5図6）・近江益須寺（第5図9）をあげることができる。

これらの瓦を総体としてみると、軒平瓦は法輪寺例を手本とし、軒丸瓦は面違鋸歯文縁の平隆寺例を手本としているものが多く、古式の瓦文様の波及に際し、単独寺院の文様ではなく、法輪寺的要素と平隆寺的要素とが結合して、影響を及ぼした可能性が高いと思われる。

法輪寺（三井寺）は、『上宮聖徳太子伝補闕記』³³に、「斑鳩寺被災之後。衆人不得定寺地。（中略）百済開師。円明師。下水君雑物等三人合造三井寺。」とあり、『聖徳太子伝暦』³⁴には、「又百済開法師。円明法師。下水君新物等三人。合造三井寺云々。」とあり、百済から渡来した開師（開法師）などによる知識層による造寺活動をうかがわせる。

一方、平隆寺については『聖徳太子傳私記』²⁶に、平隆寺「此寺勢野郷、太子安息、平群臣等之香花供養時所也」とあり、平群氏の氏寺である可能性が高いが、北の平群谷には紀氏神社があり、紀氏との関係も合せて考えるべきであろう。

さらに大和の例としては長林寺があり、丸瓦に「長倉人寺瓦」か、又は「長倉寺瓦」と刻む文字瓦が出土しており³⁵、長は「おさ」で、長林寺が日佐氏と関係がある可能性が高くなる。『新撰姓氏録』大和国皇別には、「日佐 紀朝臣同祖。武内宿禰之後也。」とある。そして長林寺と同範の法隆寺式軒丸瓦が藤原京左京六条三坊（木之本廃寺）で出土³⁶していることも、見逃せない重要な点だと思う。木之本廃寺は百済大寺と直結する寺院であり、長林寺の百済的要素の強いことはここにも示されているように思う。

次に近江の諸例であるが、これらの瓦は野洲郡と栗太郡にある。

野洲郡には益須寺³⁷と福林寺³⁸があり、栗太郡には手原廃寺¹⁷と樋ノ口瓦窯¹⁷がある。ただし、益須寺と手原廃寺の距離は3kmしか隔たっておらず、微妙な位置と距離の関係にある。瓦の文様で言えば野洲郡出土瓦は法隆寺例に似ており、栗太郡出土瓦は法輪寺・平隆寺例に似る。

まず、益須寺は持統七年・八年紀によると、益須郡の醴泉が発見された後、多くの病人が益須寺に宿泊して治療したため、益須郡のこの年の税を免除し、初めて醴泉を発見した葛野羽衝と百濟土羅羅女に、緇・布・鍬を賜っている。益須寺と百濟人との関係が想定できる。

次に福林寺は、東寺文書に収める康和三年などの弁官宣旨³⁹によると、天武天皇の御代に石村村主宿禰が鎮護国家の奉為に福林寺を建立という。天智三年紀では、栗田郡人磐城村主殷の名がみえ、天平宝字八年紀には押勝を斬った人物として石村村主石楯がみえる。石楯は天平神護元年に坂上忌寸を賜姓されており、倭漢氏である（ただし、磐城村主と石村村主が同一かどうかは確言できない）。

さらに手原廃寺であるが、この寺の1.5km東には高野の地名があり、式内高野神社がある。『新撰姓氏録』の右京諸藩下には、「高野造 百濟国人 佐平余自信之後也」とある。これも百濟人との関係が想定できる。

この他に野洲郡の記述として注目すべきものに、『新撰姓氏録』の山城国皇別の日佐（おさ）の条がある。「紀朝臣同祖。武内宿禰之後也。」とし、欽明天皇の御世に、同族4人、国民35人を率いて帰化とある。最後に、「是近江国野洲郡日佐。山代国相楽郡山村日佐。大和国添上郡日佐等祖也。」とあって、平安時代初期には、日佐氏は野洲郡の氏族が最も栄えたようである。日佐は百濟の姓とみなされ、「日佐」は古代朝鮮語に由来するもので、実体は百濟からの渡来人と考えられる。しかも、欽明朝での渡来伝承をもつとすれば、欽明元年二月紀の「百濟人已知部投化。置倭国添上郡山村。今山村已知部之先也」との関係が想定できる。

以上のように近江の諸例については単一の理由でなくいくつかの事情が交錯しているようだが、野洲郡の益須寺と福林寺は野洲郡日佐氏との関係が強く、栗田郡の手原廃寺（及びその瓦を焼成した樋ノ口瓦窯）は、百濟滅亡時の亡命百濟人に関係するものと考えておきたい。

最後に伊賀三田廃寺であるが、軒瓦をみると法隆寺式軒瓦の組合せ、東大寺式軒瓦の組合せにおいて、極めて中央と直結した姿を示している。三田廃寺は阿拝郡にあるが、伊賀の人で壬申の乱の東道将軍として活躍した、紀臣阿閉麻呂と関係があるのではないかと思う。天武三年二月に紀臣阿閉麻呂は卒するが、「天皇大悲之。以勞壬申年之役、贈大紫位」とある。阿閉麻呂の菩提寺として再建された可能性のある伊賀国内の寺院を求めれば、三田廃寺をおいて他にないように思われるのである。紀臣阿閉麻呂は紀氏同祖としての日佐

氏との関係もあったのではないだろうか。

③ 百済人と倭漢氏

百済人および倭漢氏との関係を示すと思われる寺院は、これまでもふれてきたが、以下では大和山村廃寺・摂津芦屋廃寺について述べよう。

山村廃寺は山村忌寸の氏寺と考えられ、『新撰姓氏録』³²の大和国諸藩⁴⁰には、「山村忌寸己智同祖。古禮公之後也。」とある。ところが、山村忌寸安野らは、『三代実録』貞観六年条に「左京人山村忌寸安野。夏野。全子等賜姓紀朝臣。紀角宿禰之後也」とあるように、864年紀朝臣の氏姓を賜わる。おそらくこれは仮冒ではあるが、紀氏との密接な関係はうかがえる。そして、実体は山村許智の後である山村忌寸氏⁴⁰の一族であろう。欽明元年紀には「百済人己知部投下。置倭国添上郡山村。今山村己知部之先也。」とある。

次に摂津芦屋廃寺は葦屋漢人に関係するものであろう。まず、『新撰姓氏録』の摂津国諸藩には「葦屋漢人。石占忌寸同祖。阿智王之後也。」とある。石占忌寸⁴⁰は「坂上大宿禰同祖」であり、倭漢氏である。和泉国諸藩には葦屋村主は「出自百済意宝荷羅支王也。」とある。『日本霊異記』下巻第二に、大和興福寺の禅師永興は俗姓は葦屋君の氏で、摂津国手島郡の人であり、一名市往の氏とも言ったとある。『新撰姓氏録』右京諸藩下⁴⁰には、「市往公出自百済国明王也。」とあり、明王は武寧王の子、聖明王である。一方、正倉院文書には天平神護元年の「検仲麻呂田村家物使請経文」のなかに、「葦屋倉人嶋磨」がみえ、『新撰姓氏録』摂津国諸藩には、「蔵人 石占忌寸同祖。阿智王之後也。」とある。

芦屋廃寺がどの氏族と関係するのかが厳密には決め難いが、大きくみて倭漢氏の葦屋漢人と関係し、百済人も関係するとみていいのではなかろうか。

④ 呉勝と百済人

摂津太田廃寺・播磨下太田廃寺・讃岐仲村廃寺について述べよう。

『播磨国風土記』揖保郡の条「太田里」に、「太田と称う所以は、昔、呉の勝、韓国より度り来て、始め、紀伊国名草郡太田村に到りき。其後分れ来て、摂津国三嶋賀美郡太田村に移り到りき。其が又、揖保郡の大田村に遷り来けり。是は、本の紀伊国大田を以ちて名を爲すなり」とある。

摂津太田廃寺は法隆寺軒平瓦216Cと同範の瓦を出土し、播磨下太田廃寺には軒丸瓦・軒平瓦とも法隆寺式の軒瓦がある。呉の勝は、「韓国より度り来」たのであるが、呉の字の付く人名の出自は、百済・加羅諸国等の韓南部諸国に限定されるという指摘がある⁴¹。

一方、讃岐仲村廃寺の軒瓦は、かつて藤井直正氏が指摘したように⁴²、播磨下太田廃寺の軒瓦の組合せと文様が類似している。同じく『播磨国風土記』飴磨郡の条「漢部里」に、「漢部里」に、「漢と称ふは、讃藝（さぬき）の国の漢人等、到来たりて此處に居りき。故、漢部と號く」とあるが、播磨大田村と漢部里は、現姫路市の西と東で、13kmほど離れてお

り、両地名が直接結びつくものではない。ただ、摂津太田廃寺も、播磨下太田廃寺も、讃岐仲村廃寺も百済を中心とする朝鮮半島南部からの渡来人と密接な関係をもって建立された寺院であると考えてよいだろう。

D. 紀伊上野廃寺・伯耆斎尾廃寺式忍冬唐草文軒平瓦

法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦とは別のグループの、系譜の異なる忍冬唐草文軒平瓦が突然現われ、すぐに消えていく。これは紀伊上野廃寺で出現し、同じ頃に斎尾廃寺に伝播し、さらに文様の省略化したものが備後の伝吉田寺に現われる。

紀伊上野廃寺軒平瓦は4種の範（報告書⁴³のaⅠ・aⅡ・aⅢ・aⅣ）があり、中央に宝珠様中心飾りをもつもの1種（aⅠ：第6図2）、他は偏行唐草文軒平瓦（aⅡ～aⅣ）である。斎尾廃寺軒平瓦⁴⁴は1種の範で、宝珠様中心飾りをもつ均整唐草文軒平瓦で、伝吉田寺軒平瓦⁴⁵も1種の範であるが、こちらは偏行唐草文軒平瓦である。

この全体として6種の範型の文様は、均整唐草文（斎尾と上野aⅠ）と偏行唐草文（上野aⅡ～aⅣ、伝吉田寺）、唐草文の途中に結節のあるもの（斎尾と上野aⅠ～aⅣ）と結節のないもの（伝吉田寺）、唐草の各単位に三葉形の蕾を有するもの（斎尾と上野aⅠ：第6図3）、2・3の枝葉のうちの1本が唐草の茎に巻きつくもの（上野aⅢ：第6図4、上野aⅣ：第6図5）、1単位に2本の枝葉が唐草の茎に巻きつくもの（上野aⅠ：第6図2）、蕾がおたまじゃくし様に変形したもの（伝吉田寺：第7図6）など、かなりの多様性がある。

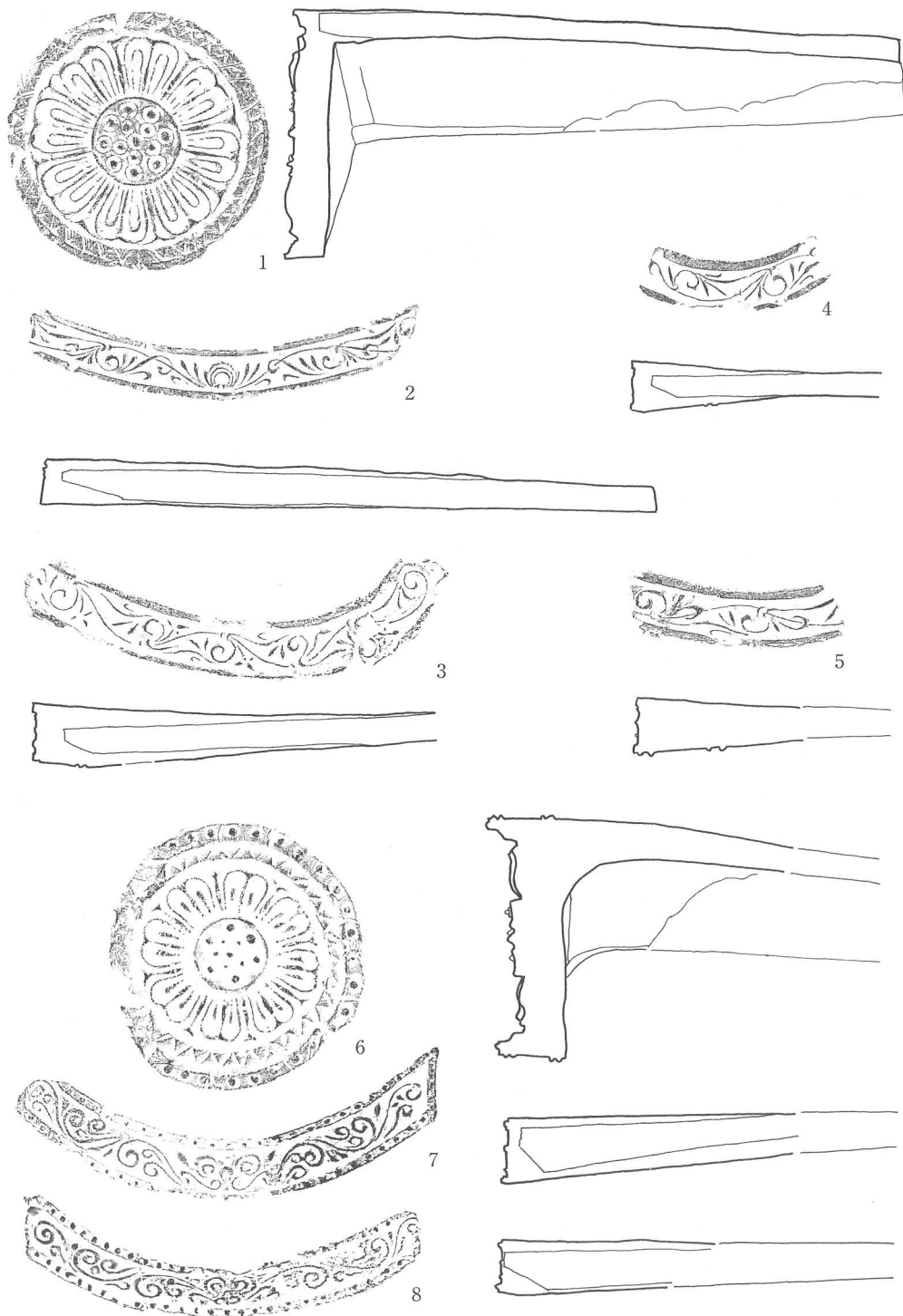
しかしすべてに共通する特徴としては、反転する唐草の構成が一つの約束事からなりたっているのである。即ち、反転する唐草が5本の支葉から成り立っており、まず茎に近い第1支葉が強く巻き込み、次に第2・第3支葉が短かく、第4支葉がきわめて長いもので、最後に外側の第5支葉が外側に巻き込むという点である。ここに、紀伊上野廃寺・伯耆斎尾廃寺式の忍冬唐草文軒平瓦の文様上の特徴が認められるのである。法隆寺式では、反転する唐草は3～4本の支葉から成り立ち、「3本の枝葉のうち最も巻きの強い曲線の先端付近から新たに4本目のゆるやかな曲線の枝葉を派生させている」特徴をもち、その差は明瞭である。

ところで法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦の大部分が、桶巻きで粘土円筒形を作り出し、範型を打ち込んで文様をつけ、その後4分割する（即ち日本式である）のに対し、紀伊上野廃寺・伯耆斎尾廃寺式忍冬唐草文の6つの範でできた軒平瓦は、すべて文様のある木製範を水平に置き、瓦当部に粘土をつめ込み、平瓦粘土を垂直に立てて接合し、接合粘土を瓦当と平瓦にまきつけるように作り上げる特徴をもっている（即ち新羅式である）。

かくして、これらの軒平瓦を出土する寺院と新羅との関係を検討する必要性が生じるのである。

E. 上野廃寺・斎尾廃寺式軒平瓦と新羅

『日本霊異記』の下巻第三十に、「老僧観規は、俗姓を三間名干岐といひき。紀伊国名草



第6図 紀伊上野廃寺出土の軒瓦 (1:5)

郡の人なりき。」「先祖の造れる寺、名草郡の能応の村に有り。名をば弥勒寺と曰ひ、字を能応寺と曰ふ」とあり、名草郡野応郷について、『和歌山県の地名』⁴⁶は、「名義は野にて応は添声にすぎない」を引用し、「郷名のもととなった現和歌山市上野・北野を含む地域に拡大比定すべき」であるとする。即ち、能応は紀伊上野廃寺の所在地である。

『新撰姓氏録抄』未定雑姓、右京に「三間名公。弥麻奈国王、牟留知王の後なり」「意富加羅国の王子、名は都努我阿羅斯等」⁴⁷とある。都努我は新羅や金官加羅の最高官位号「角干」をツスカ(ン)と訓んだものかとする⁴⁸。即ち紀伊上野廃寺は新羅・金官加羅系の寺院であると考えてよいだろう。

次に伯耆斎尾廃寺であるが、これは北2.5kmにある日本海岸と関係があろう。持統三年に政府は出雲国司に詔して、風浪に遭値へる蕃人を上げ送らしめているが、斎尾の北の八橋町あたりが朝鮮からの漂着民移動の一拠点とすれば、先に紀伊上野廃寺で想定した三間名公との関係を、斎尾廃寺においても同様に想定してよいのではないだろうか。即ち三間名公の先祖「意富加羅国の王の子、名は都努我阿羅斯等」⁴⁹は、海の北をめぐりて、出雲国を経て、越の国に至れりという伝承をもつものであり、紀伊-出雲-越前という、日本海側の水運を得意とする氏族ではなかろうか。

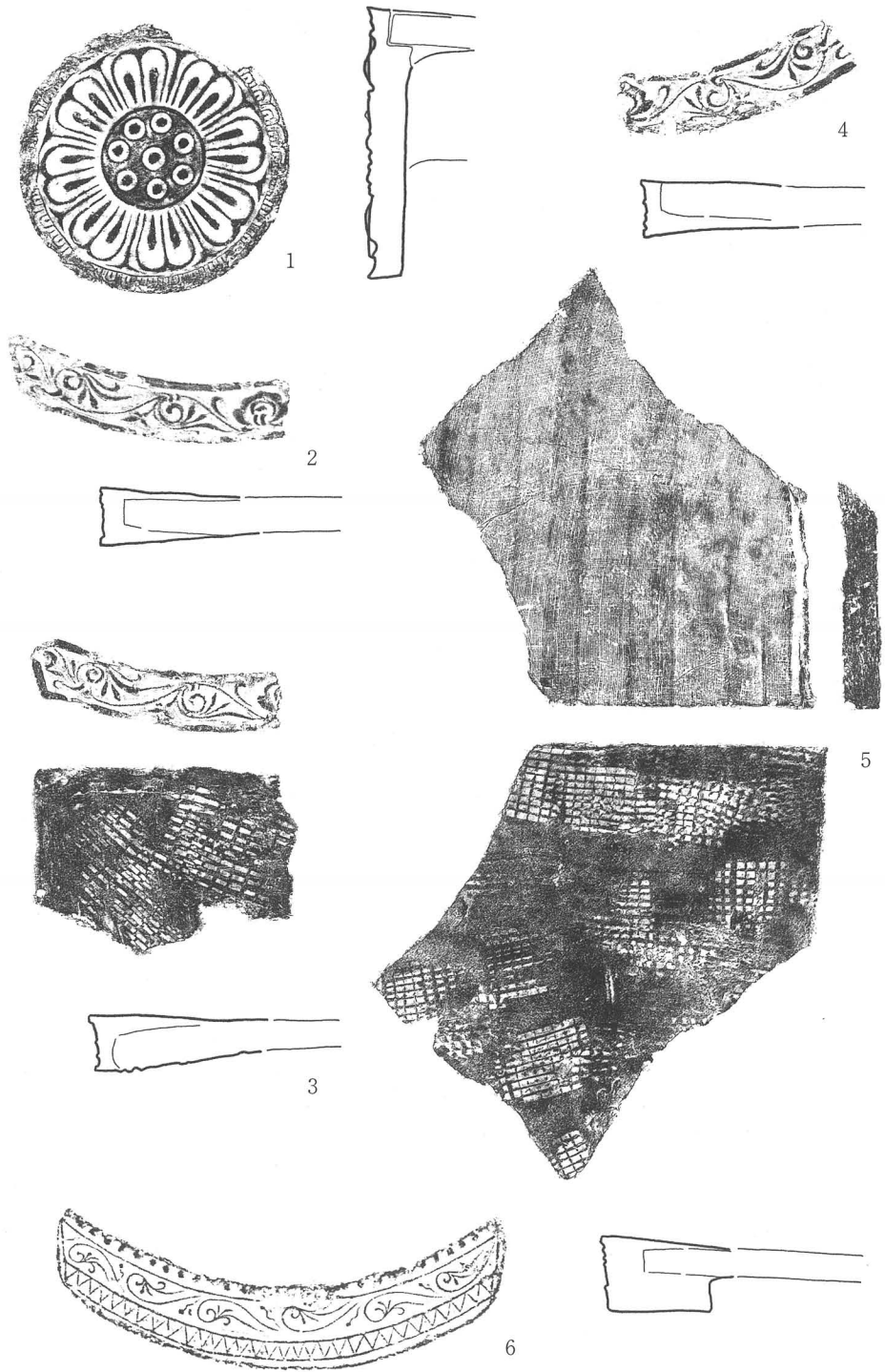
F. 統一新羅・帝釈寺・中原塔坪里寺址の忍冬唐草文軒平瓦

韓国における忍冬唐草文軒平瓦について述べよう。まず慶州の忍冬唐草文軒平瓦、次に益山帝釈寺の忍冬唐草文軒平瓦、最後に中原塔坪里寺址の忍冬唐草文軒平瓦である。

① 慶州の忍冬唐草文軒平瓦

慶州の忍冬唐草文軒平瓦のうち最古のものは「三国末～統一初」の年代が与えられているが、660年の唐・新羅連合軍による百濟滅亡および668年の唐による高句麗滅亡以降を統一新羅時代と呼ぶとすれば、これらの軒平瓦の年代を統一新羅初期におくことができよう。

これらは文様細部で若干の差はあるが、大きくは一つのパターンの文様構成をとる。即ち、左右両端から中心に向かって唐草文が流れ(均整唐草文)、中心飾りを配することはなく、唐草文の1単位は4～6本の枝葉からなる点が共通している。また文様構成として、まず茎に近い支葉が強く巻き込み、つぎに短い1支葉または3支葉があり、さらに次の支葉が長く屈曲し、最後の支葉が外側に強く巻き込む点が共通している。文様の細部の変化を『雁鴨池』⁴⁹所収の軒平瓦文様で見ると、左右両端から中心へ流れる唐草文が中央で交差するもの(雁鴨池軒平瓦14:第8図3、以下雁鴨池略す)、接するもの(四天王寺例にある)、やや離れるもの(軒平瓦15～18:第8図4～7)があり、さらに唐草文の途中に結節のあるもの(軒平瓦14:第8図3、軒平瓦18:第8図7)とないもの(軒平瓦15～17)との両者がある。新羅例の文様構成における細部の大きな差としては、2番目に配置される支葉が1本のもの(軒平瓦15～18:第8図4～7)と3本のもの(軒平瓦14:第8図3)の両者がある。日本の上野廃寺・斎尾廃寺軒平瓦では2番



第7図 齋尾廃寺の瓦など (1:5)

齋尾廃寺 (1~5) 伝吉田寺 (6)

目に配置される支葉は2本であり、この点は異なるが、それ以外の1単位としての文様構成は新羅例と日本例とで基本的に同一であると言ってよい。

なお、これらの新羅の軒平瓦の断面図が公表されてはいないが、私が実測した新羅王京出土⁵⁰の雁鴨池14に類似の軒平瓦（唐草中央で交叉し、2番目配置の支葉が3本からなり、唐草文の途中に結節をもつ）の図（第8図1・2）を示した。統一新羅初期の軒平瓦の製作技法の特徴である包み込み式の軒平瓦であることは明瞭である。

② 益山帝釈寺の忍冬唐草文軒平瓦

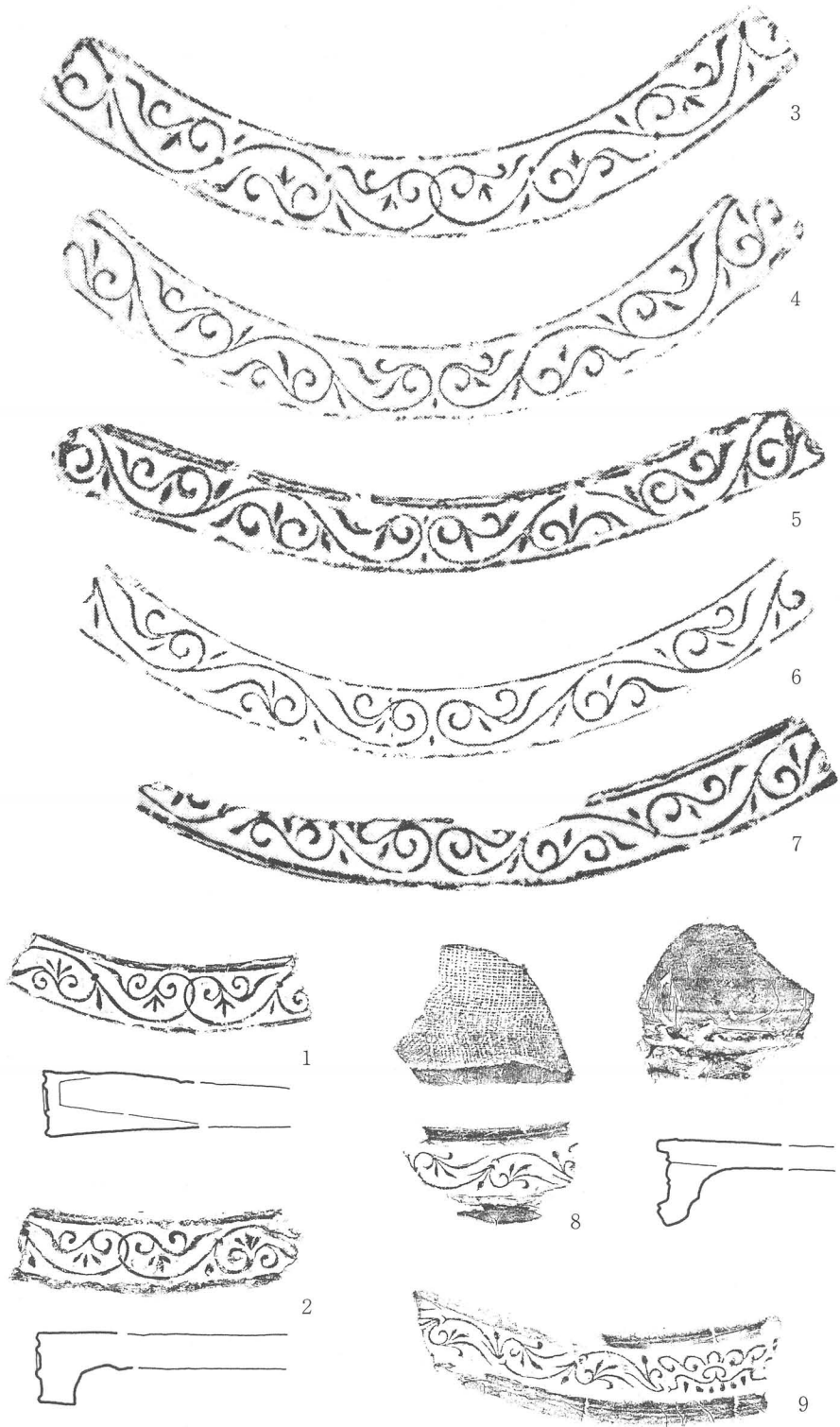
益山帝釈寺の忍冬唐草文軒平瓦は、1978年の黄壽永氏の「百濟帝釈寺考」⁵¹において図示されており、黄氏の論考以前においても以後においても、日本の瓦研究者の論文では百濟時代のものと述べたものが多い。黄氏の紹介した破片は国立公州博物館所蔵瓦（第8図8）であり、平瓦部凹面に布目痕と糸切痕を残し、平瓦部凸面端部に顎部粘土を貼りつけて瓦当部粘土を作り出したことはわかるが、この1破片ではこれ以上の製作技法のイメージはわからない。

一方、国立全州博物館所蔵の益山帝釈寺の瓦（第8図9・第9図）は瓦当部が完形で、平瓦部もかなりの程度残るものがあり、この破片から製作技法をイメージしてみよう。

まず技法的な観察点は次のとおりである。

- i) 平瓦部凹面には梓板痕はない。
- ii) 平瓦部凹面には糸切痕と布目痕が残る。布目痕は左側面 (①-B) に接する部分では布目が続いていることを示すが、右側面 (①-A) に接する部分では布端は、ほぐれて続かないようである。
- iii) 平瓦部両側面の残る例では、左側面 (①-B) は、ほとんどが破面であるが、よく見ると平瓦部凹面に接する部分に0.3~0.5mm程度の截面（截線？）を残す。右側面 (①-A) はケズリ・ナデツケで仕上げられている。
- iv) 複数の個体を観察できたが、瓦当文様は1つの範であると判断した。
- v) 瓦当裏面は1つの谷と2つの山をもつ凹凸状の断面であり、回転ナデによって仕上げている。①-Bの破面は、回転ナデを切っている。また顎部の形態はいずれも同じ断面形であり、最終的には同じ断面形態に仕上げようとする意図が読みとれる
- vi) 平瓦部凸面端部に顎部粘土を貼りつけるのであるが、その際、瓦当および顎部は下向きで接合されている（粘土の接合の傾きで判断できる）。

以上から製作技法を復原すると、破面によって分割されていることから、桶巻作りは確実であり、1枚作りではない。まず、非開閉式の円筒桶に布を2枚はりつけ、粘土板をまきつけ、顎部粘土を加える（この時、瓦当予定部および顎部は下にある）。粘土円筒の付いた非開閉式桶を上下にひっくり返す（ちなみに、帝釈寺の軒平瓦は軽量であり、桶共の上下反転は、それ



第8図 韓国の忍冬唐草文軒平瓦 (1:4)
新羅王京 (1・2) 雁鴨池 (3~7) 帝釈寺 (8・9)

ほど困難ではないと考えてよい)。瓦当予定部分は粘土円筒の上方にあり、上から範型を打ち込み文様部を作る。その後、顎部断面を1つの谷と2つの山をもつ凹凸状に回転台上で仕上げるために、ケズリ・ナデを丹念に行なう。その後、非開閉式の円筒桶を粘土円筒からとり出し、布もはずす。

粘土円筒のまま乾燥する。

内側にきわめて浅い截線を作り、外側から叩いて破面を作り出す部分と、切り取りによって側面を作り出す部分とをあらかじめ判断し、瓦当の文様位置に合わせて分割する。おそらく粘土円筒に残った2枚の布目痕の個々の布位置の中心部に截線を入れ、外から叩いて粘土円筒を2分割する。その後の2分割（即ち全体としては4分の1分割）は、切り取りによって行なう。この切り取り部分は、平瓦部凹面からみると布目の達しない部分に該当するように切り取っているのだと思う。

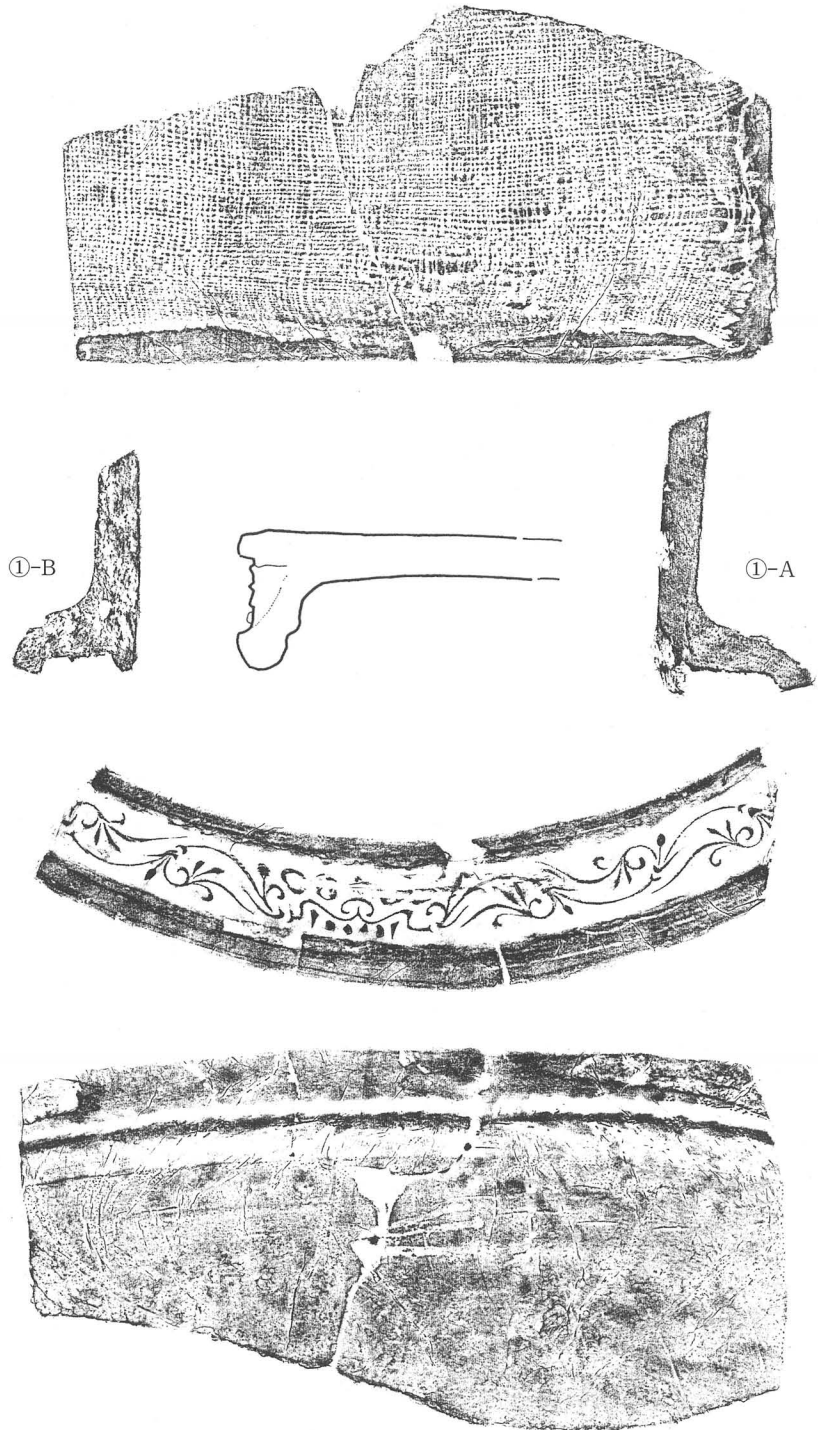
以上のように帝釈寺の忍冬唐草文軒平瓦の製作技法は、日本の桶巻作り軒平瓦とよく似た所があり、全形を仕上げで4分割する点ではよく似ている。しかし、日本の桶巻作り軒平瓦では全形をあらかじめ仕上げで、半乾燥後に範型で文様を打ち込むのであり、範型打ち込み後は顎部の整形などは行なっていない。これに対し帝釈寺の軒平瓦は、顎部粘土の作り出し、桶を付けたままでの上下反転、生粘土の段階での範打ち込み、その後の顎部粘土の整形などが終って、やっと円筒桶と粘土円筒とを分離するのであり、帝釈寺の方が手間がかかることは明瞭である。日本式の方が効率がよい。しかし日本式の場合は、粘土が半乾燥した後での範打ち込みであり、文様の出は浅く、シャープさに欠けるのに対し、帝釈寺例では文様の出は深く、鮮明な出来ばえである。以上からみると、日本の諸例と帝釈寺との間で、製作技法上は関係ないと言ってよいように思われる。

さらに、帝釈寺の忍冬唐草文軒平瓦の平瓦部凹面に杵板痕がないことからみると、非開閉式桶の使用は明瞭であり、これは新羅の影響を受けていると言ってよい。したがって、この軒平瓦の年代は、唐・新羅連合軍による百濟滅亡年の660年を遡ることはないといっているのではないだろうか。

ところで、日本の紀伊上野廃寺例との文様の酷似性は注目に値する。文様的には優劣付け難く、共通した年代のものといえよう。そして、文様もまた新羅系の文様であり、獸面と唐草を組み合わせた文様は、この帝釈寺・紀伊上野廃寺（別種の軒平瓦にある）、そして統一新羅時代の慶州の瓦において表現されている。

③ 中原塔坪里寺址の忍冬唐草文軒平瓦

中原塔坪里寺址は、忠清北道の中原高句麗碑の東南約1.5kmに位置する寺院址で、1993年に韓国教員大学校博物館から報告書が出版されている⁵²。忍冬唐草文軒平瓦は3点出土（第10図1～3）しており、技法的には次の特徴がある。



第9図 帝釈寺の忍冬唐草文軒平瓦 (1:3)

- i) 平瓦部凹面には布目痕と糸切痕が残る。
- ii) 平瓦部凹面には杵板痕とみてよい痕跡がのこる。
- iii) 瓦当から平瓦部に移行する部分での粘土断面をみると、粘土を折り曲げたような、しわが入る
- iv) 瓦当裏面には布目が部分的に残り、その後の調整痕（丹念な回転台上のヨコナデ）によって大部分が消されている。瓦当裏面の一部に格子状叩きの残るものがある。

以上3つの破片から全体の製作工程を復原するのはむつかしいが、一枚作りではなく、桶巻作りであること、平瓦部凹面に杵板痕があることから閉開式の桶を使用したこと、などは確実な点であろう。瓦当部分は粘土を折り曲げて、瓦当部に範で文様を付けたものとみられる。この粘土を折り曲げるときに布を使用したようであり、瓦当裏面の布目痕はおそらく、この時のものである。瓦当文様の出は浅く、粘土押し込み用の範ではなく、打ち込み用の範のようである。

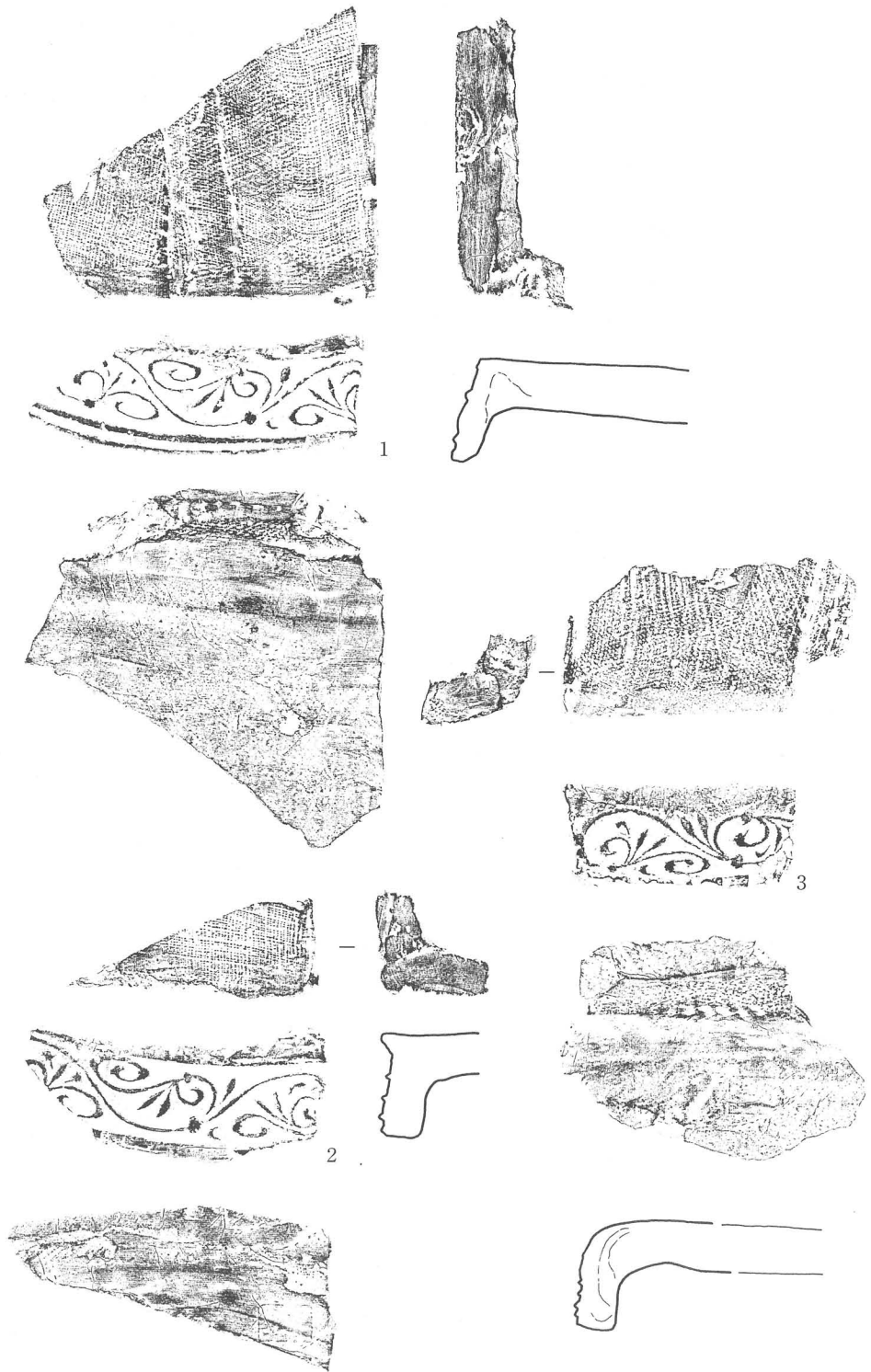
以下、誤りをおそれずに製作工程を推測すれば、閉開式の桶に粘土板を巻きつけ、格子叩きによって全体を叩き締め、その後、桶と布をはずす。この段階で、粘土円筒のみになる。次に、粘土のやわらかいうちに瓦当予定部分を折り曲げて、口縁部状のものをつくる。この時、折り曲げやすいように、2ヶ所又は4ヶ所、部分的な切り込みを入れたかもしれない。範を上から押しつける。この時、布をもった手で、下から支えて、上下からはさんで押しつけて、瓦当文様を作り出す。口縁部状のものの上で、これを4回繰り返す。その後、瓦当裏面を整形するために、丹念な回転台状のヨコナデを行なう。その後、4分割する。以上がその推定であるが、これを前提としての、他者との比較はやめておく。もう少し、広い部分の完形に近い個体でないと、確実な製作工程復原は困難である。文様からみると、中心飾りの有無は不明だが、中央から左右に反転する忍冬唐草文軒平瓦であり、内外の支葉が強く巻き込み、その中間部に短い2～3本の支葉を配するのが特徴である。唐草に結節を有している。年代は、8世紀前半のものであろうか。

3. 湖東式軒瓦について－高句麗的なもの－

湖東式軒瓦について山崎は1983年の「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」において、次のように主張したことがある。

第1に、愛知郡・蒲生郡に「軽野寺式」軒瓦が分布するのは、天智四年紀の百済人を「近江の神崎郡に居き」、天智八年紀の百済人等を「近江国蒲生郡に遷し居く」などの記述、即ち百済からの亡命者たちと深く関わりあうであろうという事。

第2に、日本において重弧文軒平瓦が発案されて約20～30年後に重弧指圧文軒平瓦が出現し、いわゆる「軽野寺式」軒瓦が湖東に分布するのは、百済の亡命者との関係が考えられ



第10図 中原塔坪里寺址の忍冬唐草文軒平瓦 (1:3)

ることである。

私は、今、自分の論文を読み直して、百済を強調しすぎたのは、瓦の分析からの結果ではなく、『日本書紀』の記述と瓦文様とを安易に結びつけようとしたためであると反省している。

一方、小笠原好彦氏は、2001年に「湖東式軒丸瓦の成立年代と系譜」⁵³として、「湖東式軒丸瓦に関連するものを中国、朝鮮半島に求めると、百済の公州にある大通寺址、西穴寺址、南穴寺址の軒丸瓦に共通性をもつものをみいだす」として、「公州の大通寺址、西穴寺址、南穴寺址の瓦当文様が愛知郡の氏寺に導入されたことの背景」について、述べている。

しかし、公州のこれらの軒丸瓦は、資料を紹介した軽部慈恩氏⁵⁴自身が、「この瓦の文様は新羅統一後に成った慶州地方より出土のものに類似の点もある」と記しているように、統一新羅後のものと考えてよいのである。即ち、「大通寺例」も「南穴寺址例」も、珠文帯をもつ外区内縁を含んで高く突出するのが特徴であり、これは統一新羅の軒丸瓦の特徴である。さらに、公州のこれらすべての瓦は無子葉単弁（別名、素弁）の軒丸瓦であり、湖東式軒丸瓦の有子葉単弁（別名、単弁）や重弁の瓦とは、蓮弁の形が全く異なるのである。

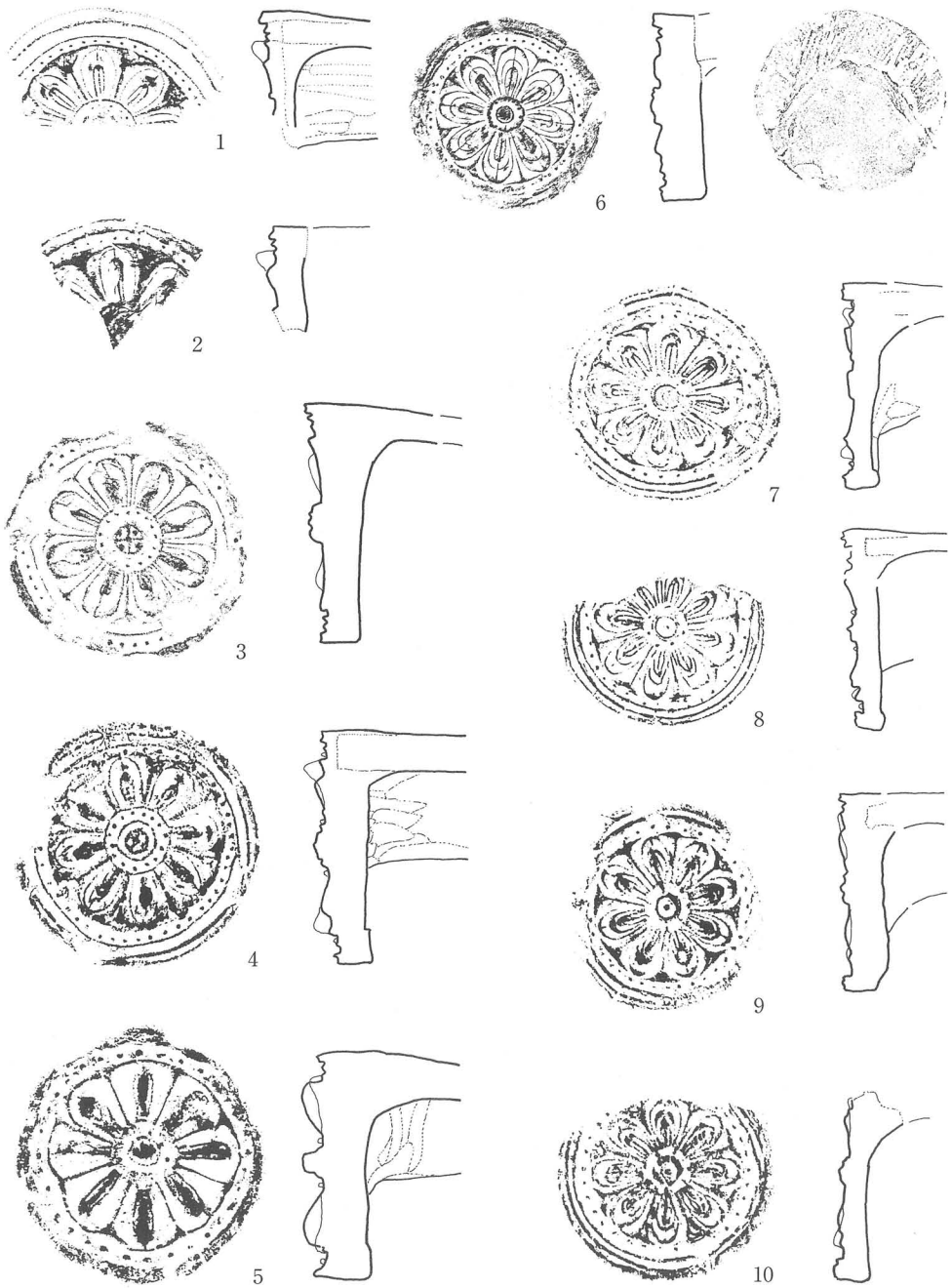
したがって、これまでの見解をすべて白紙にもどし、湖東式軒瓦の文様上の特徴、技法上の特徴を再整理する必要があるとあり、中国の瓦・朝鮮の瓦を全体として比較して、最も類似した瓦を捜し出す必要があるといえよう。

A. 湖東式軒瓦の文様上の特徴

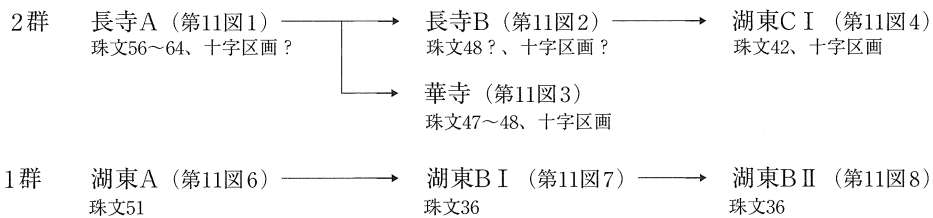
湖東式軒丸瓦を分類・細分し、編年をおこなったのは1997年の重岡卓氏の、「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察⁵⁵という論文である。重岡氏の説明を少し言い換えて表現すると、重弁のグループが1群であり、「弁の表現について凸線の省略や反りの単調化」⁵⁵（凸線は弁中央の稜線のこと）を考慮に入れて、外区の珠文数の多い順に並べると、湖東A（51個）→湖東BⅠ（36個）→湖東BⅡ（36個）→湖東F（24個）の形（重岡氏の表現による）式変化がたどれるというものである。次に、有子葉単弁のグループが2群であり、「外区外縁の重圏文が断面三角のものから凸線への変化」⁵⁵および、外区珠文数を考慮に入れて並べると、長寺A（珠文数56～64個）→長寺B（48?個）・湖東CⅠ（42個）・湖東CⅡ（42個）→湖東D（26?個）→湖東F（30?個）の形式変化がたどれるとしている。

2群においては長寺A・長寺Bの軒丸瓦が破片で中房部分が不明であることから細かな検討ができないが、湖東CⅠでは、中房を十字形に区画する点は注目してよい。

一方、2005年に資料紹介された湖北における華寺遺跡⁵⁶の軒丸瓦は、中房の突出、中房の十字形の区画、珠文数の多さ（47～48個）などから注目すべきものである。仮に、長寺A・Bの中房に十字形の区画があるとしたら、湖東の1群・2群および湖北例を含めて次のような編年が可能になると思う⁵⁷。



第11図 湖東式軒丸瓦 (1:5) 註55 重岡論文などによる
 長寺遺跡 (1・2) 華寺遺跡 (3) 野々日廃寺 (4) 小八木廃寺 (5) 軽野塔ノ塚廃寺 (6~10)



いずれにしても、華寺遺跡の軒丸瓦は中房の突出状態、弁端の二重輪郭などの初源的な文様形態を残しており、古く位置付けた方がよいと思う。

ここで、古式の湖東式軒丸瓦の特徴をあげるとすれば、

- i) 蓮弁は有子葉単弁か、重弁であり、
- ii) 中房の突出が大きいこと、
- iii) 中房が十字形に区画されるものが多いこと、
- iv) 中房周縁に珠文帯がめぐること、
- v) 外区内縁に珠文縁を、外区外縁に素文縁をもつことである。

これを一般的に朝鮮三国の軒丸瓦と比較すると、(ii) と (iii) の点において高句麗との関連が強いことは明らかである。

B. 湖東式軒丸瓦の技法上の特徴

軒丸瓦における瓦当と丸瓦の接合法については、一番大事な点が見落されている。湖東式の1群における最古の軒丸瓦である湖東A(軽野塔ノ塚廃寺例、珠文数51)の瓦当裏面には、ヘラによる刻みを細かく入れている(第11図6)⁵⁸。丸瓦の凹面、凸面、端面に刻みを入れるものは多いが、瓦当裏面に刻みというのは、飛鳥・白鳳・奈良時代を通じてほとんど認められない技法なのである。百済の瓦、新羅の瓦にもない。一方、中国北朝の瓦および高句麗の瓦においては、瓦当裏面の刻みによる接合痕は通有のものとして認められる。この点からも高句麗との関連が強いことが明らかである。

なお、古式の湖東式軒丸瓦について、丸瓦部が粘土紐でできているか、粘土板でできているか、私は知らない。

C. 湖東式軒丸瓦と組み合う軒平瓦－波状重弧文軒平瓦を中心として－

湖東式軒丸瓦に共伴するのは主として波状重弧文軒平瓦であり、この波状重弧文軒平瓦については大脇潔氏⁵⁹による4分類がある。すべてに共通するのは、軒平瓦瓦当面の凸面側広端縁に指によるひねりを加える点であり、分類点としては、瓦当上端から中央部は重弧文だけのもの(A)、重弧文の上に縦方向の平行線刻みを入れるもの(B)、斜格子状の刻みを入れるもの(C)、○や×の刻印を入れるもの(D)である。ただし、この4分類だけでは、(A)は湖東南半の蒲生郡・愛知郡のみにあり、(C)は軽野塔ノ塚廃寺のみにあるというように地域的な片寄りがあり、(C)は文様論的な細分が必要であり、(D)は藤原宮段階の後

出する瓦の一群であり、最古の波状重弧文軒平瓦の選定には、やや物足りない所がある。

東アジアにおける波状重弧文軒平瓦の変遷をみると、516年創建の北魏永寧寺⁶⁰では、瓦当中央に弧線を刻み、重弧下端の指頭文、それに重弧中央の指頭文があり、最後に瓦当を磨く。次に東魏（534～550）・北斉（550～577）の都である鄴城^{61・62}では、押し引き重弧文と重弧下端の波状指頭文、それに重弧中央の波状指頭文（第12図8）があり、重弧文の上半部にも文様を付けるものが多い。これからみると、日本の波状重弧文軒平瓦の出現時にも、重弧文中央には文様があったとみるのが自然であり、大脇氏分類の中では（B）又は（C）が、より古いものであるといえよう。

軒丸瓦との組み合わせでみると、軽野塔ノ塚廃寺の（B）（第12図1・2）、華寺遺跡の（C）（第12図6）と米字の連続スタンプ文様（第12図5）、さらに長寺遺跡の范型による×字連続文（第12図3・4）などが、古い軒平瓦として候補にのぼるであろう。このうち華寺遺跡の（C）には、粘土紐と粘土板の両者があり、華寺遺跡の米字の連続スタンプ文様をもつ軒平瓦は粘土紐で作られている。

湖東式の最古の軒平瓦が確定できない訳だが、少なくとも百済・新羅の6・7世紀の瓦は粘土板で作られ、高句麗の瓦は粘土紐で作られていることを強調しておきたい。華寺遺跡の粘土紐で作られた軒平瓦は、高句麗との関係が深い、とみてよいのである。

D. 湖東式軒丸瓦に最も類似した中国・朝鮮の例

小笠原好彦氏は湖東式軒丸瓦に関連するものとして、「百済の公州にある大通寺址、西穴寺址、南穴寺址の軒丸瓦」⁵³をあげたが、これらはいずれも統一新羅時代の軒丸瓦であることを先述した。

ここで改めて、湖東式軒丸瓦に類似する瓦を中国・朝鮮地域から捜し出すと、東魏・北斉時代の都である鄴城の例が最も似ている。鄴城の軒丸瓦は外区が素文縁の無子葉単弁の軒丸瓦が最も量が多く、次に外区内縁に珠文帯のある無子葉単弁のものが出てくる。これらは、いずれも6世紀代のものとみてよい。

ところが鄴南城西郊出土のものになると、中房の蓮子の1+8の配置での、中央部分の1個が大きくなったり、弁端切込式の強く隆起する蓮弁などがあらわれ、これらはいずれも外区内縁に珠文帯を持っている。そして、これらの仲間の中に、点と円で囲まれた中房をもち、中房周辺に13個の珠文があり、8弁の有子葉単弁をもち、外区内縁に43個の珠文を配する湖東式軒丸瓦に類似した瓦（第12図7）がある。

この軒丸瓦が北斉（550～577）の末年までに収まるのか、あるいは7世紀のものなのかは不明であるが、後者の可能性が高いのではないかと思う。そして先述したように鄴城には押し引きの波状重弧文軒平瓦があり、丸・平瓦は粘土紐で作られており、湖東式軒丸瓦に類似した軒丸瓦の瓦当裏面には、丸瓦接合のためのヘラによる刻みがある。このように、鄴

南城西郊出土の軒丸瓦は、湖東式軒丸瓦ときわめて類似すると言ってよいが、日本での湖東式軒丸瓦の最古のものでも、660年代以降と考えられるから、中国側が北齊時代のものとするれば90年以上もの間隔があるが、隋代または唐代のものとするれば、隋・唐領域の瓦が琵琶湖東辺に波及する意味が読みとれないし、やはり、中国北朝系・高句麗系の湖東式類似の瓦が660年頃に高句麗領域かその隣接地にあって、高句麗の亡命者と共に文様および製作技法が日本に渡来したと考えた方がよいだろう。

高句麗領域において、首都平壤、さらに集安そして遼寧省でも波状重弧文軒平瓦や湖東式類似の軒丸瓦は知られていない。しかし中国北朝と高句麗との密接な関係や、鄴城出土瓦に類似する文様は、平壤より遼寧省⁶⁹にあるから、高句麗領域の西端あたりからの日本への人々の移動を考えた方がよいのではなかろうか。

文献の上からは、高句麗からの亡命者が近江に集住した史料を見出すことはできない。しかし、近江の瓦は複雑・多岐にわたっており、南滋賀廃寺の一本造り軒丸瓦などの瓦を含めて、百済との関連だけでは、とうてい理解できるものではないのである。続日本紀靈龜二年（716）には、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の7国の高麗人1,799人を以って武蔵国に遷し、高麗郡を置く記事がみられ、高句麗人の多くは関東地方に集中しているかにみえる。しかし、私は湖東式軒瓦を生み出したのは高句麗からの亡命者たちにちがいないと考えるものである。文献に記されない事実を、考古遺物から考えていくこと、これが一番大切なことであると考えられる。

4. 檜原廃寺式軒瓦について－新羅的なもの－

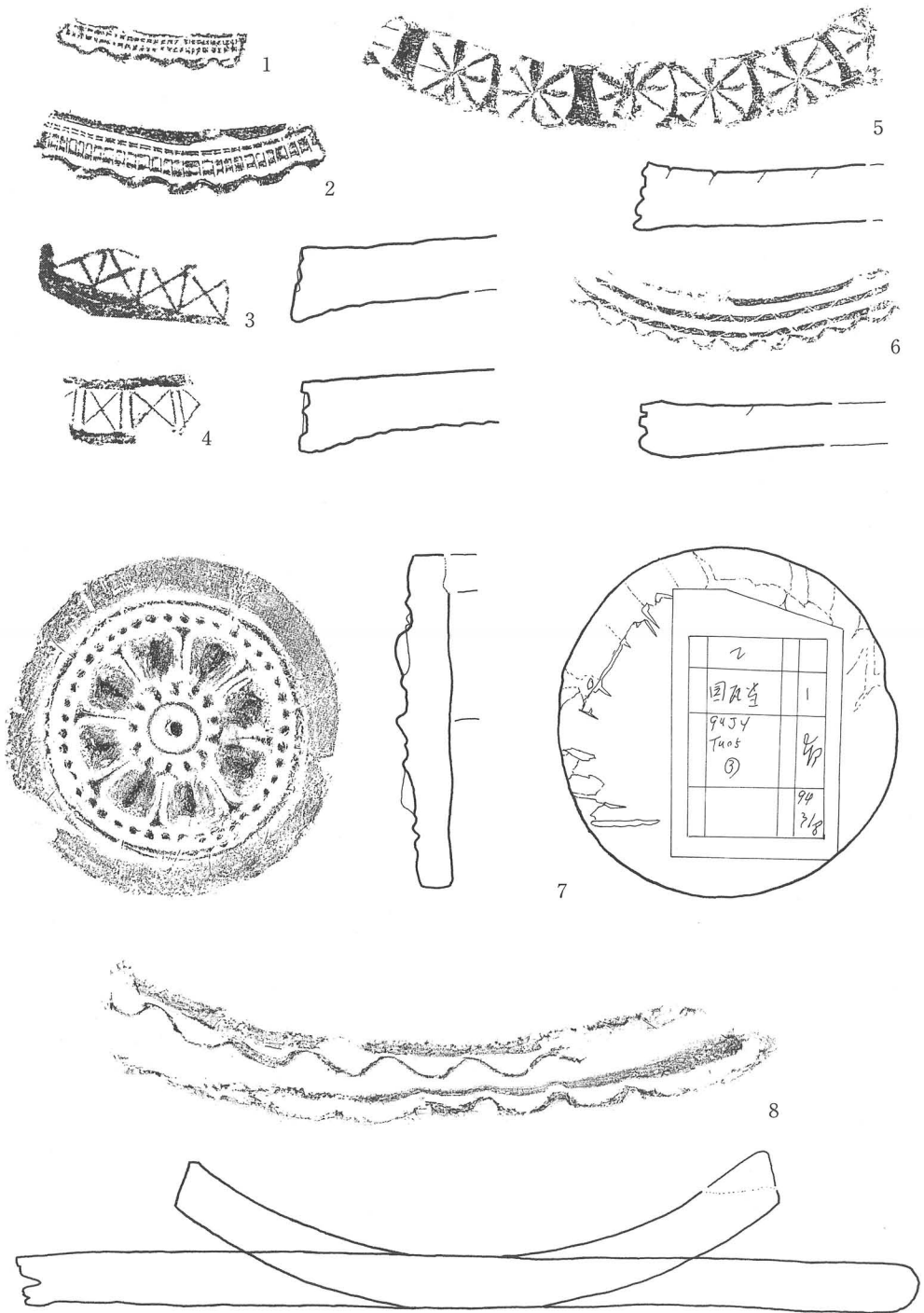
A. 6・7世紀の新羅軒丸瓦の編年

6・7世紀の新羅軒丸瓦の編年については、これまで細かく編年した例を知らないので、以下では皇龍寺⁶⁴出土瓦を主な素材とし、他の素材を少し加えながら、編年を行ってみたい。Ⅰ期はA.D.553年から569年まで、Ⅱ期は573年から584年まで、Ⅲ期は590年から633年まで（前半590～620、後半620～633）、Ⅳ期は634年から660年までである。

Ⅰ期（553～569）

『三国史記』に「真興王14年（553）春二月に、王が役人に命じて新しい宮殿を月城の東に創らせようとしたところ、黄龍が現れたので不思議に思い、改めて仏寺とし、皇龍と賜号した」とあり、また「真興王27年（566）春二月に、皇龍寺が竣工した」とあり、『三国遺事』には、「己丑の年（569）に至り周囲に墻宇し、十七年に至り方に畢る」とあり、第1期工事が553年から569年に行なわれた事がわかる。

この時の軒丸瓦は単弁7弁の蓮華文軒丸瓦（第13図1・5）で、弁基部が丸く弁端が尖るもので、瓦当厚は薄い部分では1cm程度の薄さであり、瓦当裏面は乱方向のナデによって仕上



第12図 湖東・湖北の軒平瓦と鄴城の軒瓦（1：4）
軽野塔ノ塚廃寺（1・2）長寺遺跡（3・4）華寺遺跡（5・6）鄴南城西郊（7）鄴南城外壕（8）

げるものとロクロ回転ナデで仕上げるものがある。丸瓦先端は瓦当筈にまで達するもので、瓦当部粘土と接合する。瓦当径は17.3～17.8cm。

Ⅱ期（573～584）

『三国遺事』巻三、皇龍寺丈六の条に「太建六年（574年）甲午三月（寺中記云。癸巳十月十七日：573年）鑄成丈六尊像」とあり、「甲辰（584年）、金堂造成」とあるように、金堂は真平王六年（584年）に完成している。

この時の軒丸瓦は単弁8弁の蓮華文軒丸瓦（第13図2・3・4）で、弁中央に稜線の入るものである。前段階の瓦より大形で分厚くなっており、瓦当径18.2～19.2cm、瓦当厚は薄い部分で2.4cm、最も分厚い部分で7cmとなる。瓦当裏面はロクロ回転ナデで仕上げるものが多い。丸瓦先端は瓦当筈にまで達する形で、瓦当部と接合する。

Ⅲ期（590～633）

この時期の瓦は、皇龍寺金堂の瓦より新しく、634年創建の芬皇寺⁶⁵の瓦より古い瓦という設定で、軒丸瓦を集め、細分したものである。Ⅲ期前半を長めに設定（ほぼ590～620年頃）し、Ⅲ期後半（ほぼ620～633年頃）では、瓦当裏面下端を丸く、又は斜めに仕上げ、だらしない感じのものを集めた。

皇龍寺の軒丸瓦としては、Ⅲ期前半として図245-⑥（第14図1）⑦（第14図2）⑪（第14図3）⑫（第14図4）、図246-⑧（第14図5）があり、Ⅲ期後半として図245-⑤⑮（第15図1）、図246-③（第15図2）の瓦がある。『新羅王京』の瓦としては、Ⅰ期が1111の瓦（第13図1）、Ⅱ期が1116の瓦（第13図4）、Ⅲ期前半が1112（第14図7）・1121（第13図6）・1125（第14図6）の瓦、Ⅲ期後半が1113（第15図6）・1119（第15図3）・1120（第15図7）・1122（第15図4）・1123（第15図8）の瓦である。

Ⅲ期前半の軒丸瓦は、皇龍寺ではいずれも瓦当裏面に平行叩目痕を有し、その後瓦当側縁を削り、ヨコナデを加えている。瓦当裏面と瓦当側縁の境の稜線は鋭く、整正な作りをなす。文様はⅠ期創建瓦の系譜をひくもの（図245-⑪・⑫：第14図3・4）、Ⅱ期金堂瓦の系譜をひくもの（図245-⑥・⑦：第14図1・2）、新たな有子葉単弁の文様をもつもの（図246-⑧：第14図5）など、文様の多様化が生じる。瓦当と丸瓦の接合においては、丸瓦先端は瓦当筈に達するもの（図245-⑫：第14図4、図246-⑧：第14図5）と、丸瓦先端を斜めにカットし瓦当裏面粘土と接合するもの（図245-⑥：第14図1）がある。

Ⅲ期後半の瓦は皇龍寺⁶⁶では少ないので、『新羅王京』の瓦と併せて考えると、瓦当裏面に叩きの痕跡を残すのは1例（図245-⑮：第15図1）で、他はナナメナデ、ケズリ、押しナデなどの痕跡を残し、瓦当裏面下端を丸く仕上げるもの、斜めに仕上げるものなど、瓦当裏面下端のだらしない仕上げが特徴である。丸瓦先端は瓦当筈にまで達するものが多い（1113・1119・1120・1122・図246-③：第15図2～4・6～8）。文様的にはⅢ期前半では丹念な文様

といえるが、Ⅲ期後半では8弁のものは弁中央稜線が太くなって有子葉に近くなったり、微妙な細線を用いることなく、線は太く乱れ、粗雑な範彫りの方法である。

Ⅳ期の瓦は、芬皇寺⁶⁵の瓦である。芬皇寺は『三国史記』善徳王三年（634）、「春正月、改元仁平、芬皇寺成る」のように、善徳女王三年（634）に創建された。軒丸瓦で一番多いものは単弁8弁のもの（第15図5）で、文様は皇龍寺創建軒丸瓦の文様をまねているが、中房は中心蓮子がなく、4個の蓮子を配するのみの省略文様である。瓦当裏面には格子叩目痕を残す。報告書での出土点数は56点。次に、単弁8弁で中央に太い稜線を有する瓦（第15図9）は、新羅王京のⅢ期後半の1122軒丸瓦より、さらに文様がくずれており、中房には中心蓮子がなく、4個の蓮子を配している。これは瓦当裏面に平行叩目痕を残している。報告書での出土点数は9点。この他に、単弁6弁のものも、芬皇寺創建瓦であろう。

B. 慶州仁旺洞556・566番地出土の瓦

崔兌先氏は「平瓦製作法の変遷についての研究」⁶⁷（1993年）の中で、「三国時代の高句麗・百濟地域では、模骨桶を用いていた」、「新羅地域では平瓦製作の開始期から円筒桶を用いていたと思われる」としたが、2003年12月の国立慶州文化財研究所の『慶州仁旺洞556・566番地遺蹟発掘調査報告書』⁶⁸では、古新羅段階で、新羅中枢部に模骨桶による平瓦が製作された例があることを報告している。

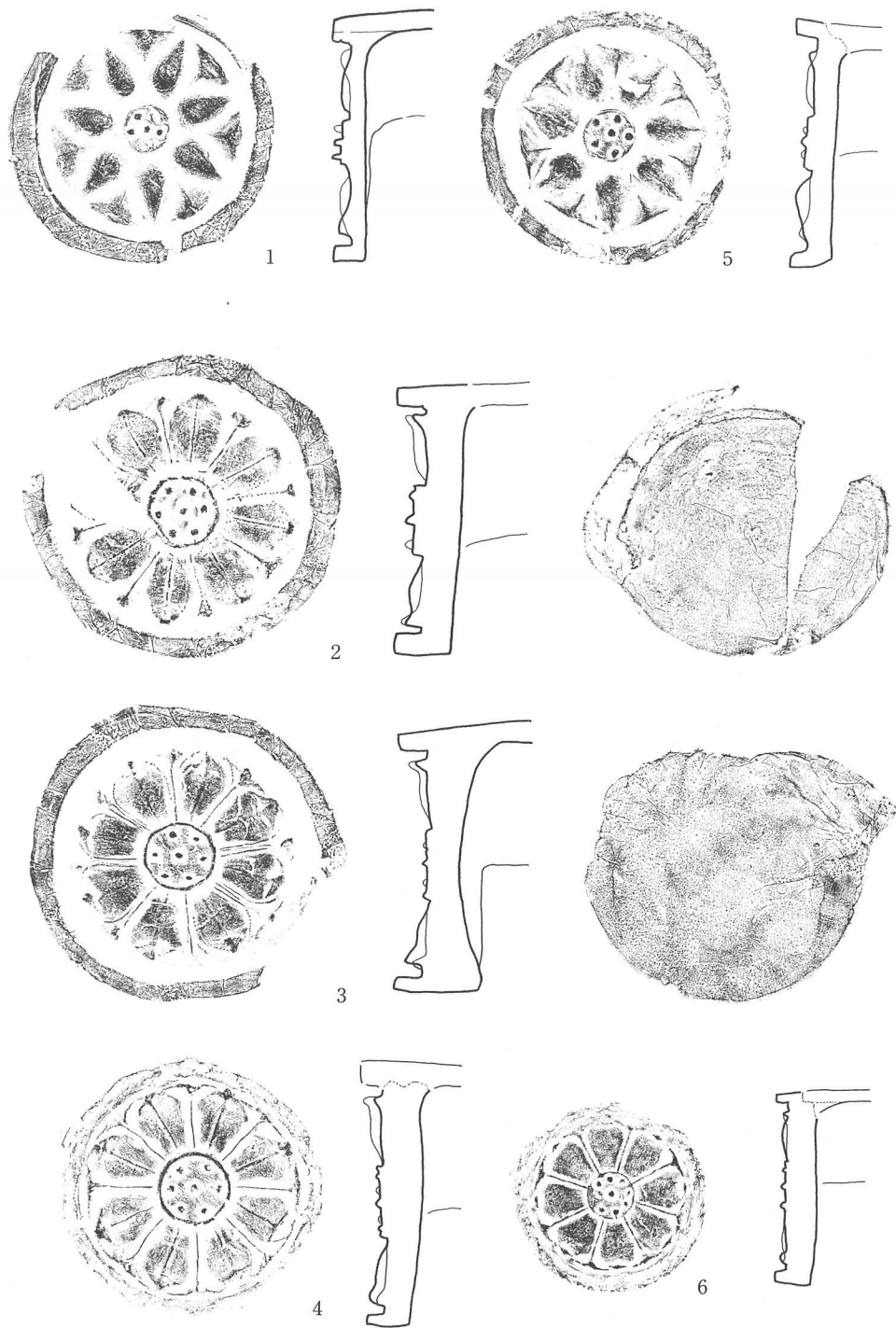
この遺跡の「2建物址出土遺物」について検討を加えてみよう。図示されているのは、軒丸瓦16点、丸瓦6点、平瓦10点である。

軒丸瓦の種類はおそらく11種の範型があり、全体が同時期であるか問題は残るが、先述の編年からすれば、Ⅲ期後半（620～633）のものは単弁6葉のもの（図30-1・5・6：第16図10・13・14）ぐらいで、他の単弁8葉のもの9種、および単弁10葉のもの（第16図11）1種はⅢ期前半の終り（610～620）頃にあるのではないかと思う。軒丸瓦では、接合式のもの、泥条盤築丸瓦による一本造りのもの（図29、図30-8：第16図8・17）の両者があり、丸瓦部は前者は行基式、後者は玉縁式（第16図9）であり、粘土素材も前者は糸切り、後者は粘土紐によって用意されている。平瓦10点についてみると、すべて糸切りによって粘土素材を用意しており、模骨桶によるもの（図35-2、図36-1・2、図37、図38、図39、図42-1・2：第17図1～3）と、円筒桶によるもの（図40・41：第17図4）の両者が出土している。後者の凸面には、格子および平行叩き痕を残している。

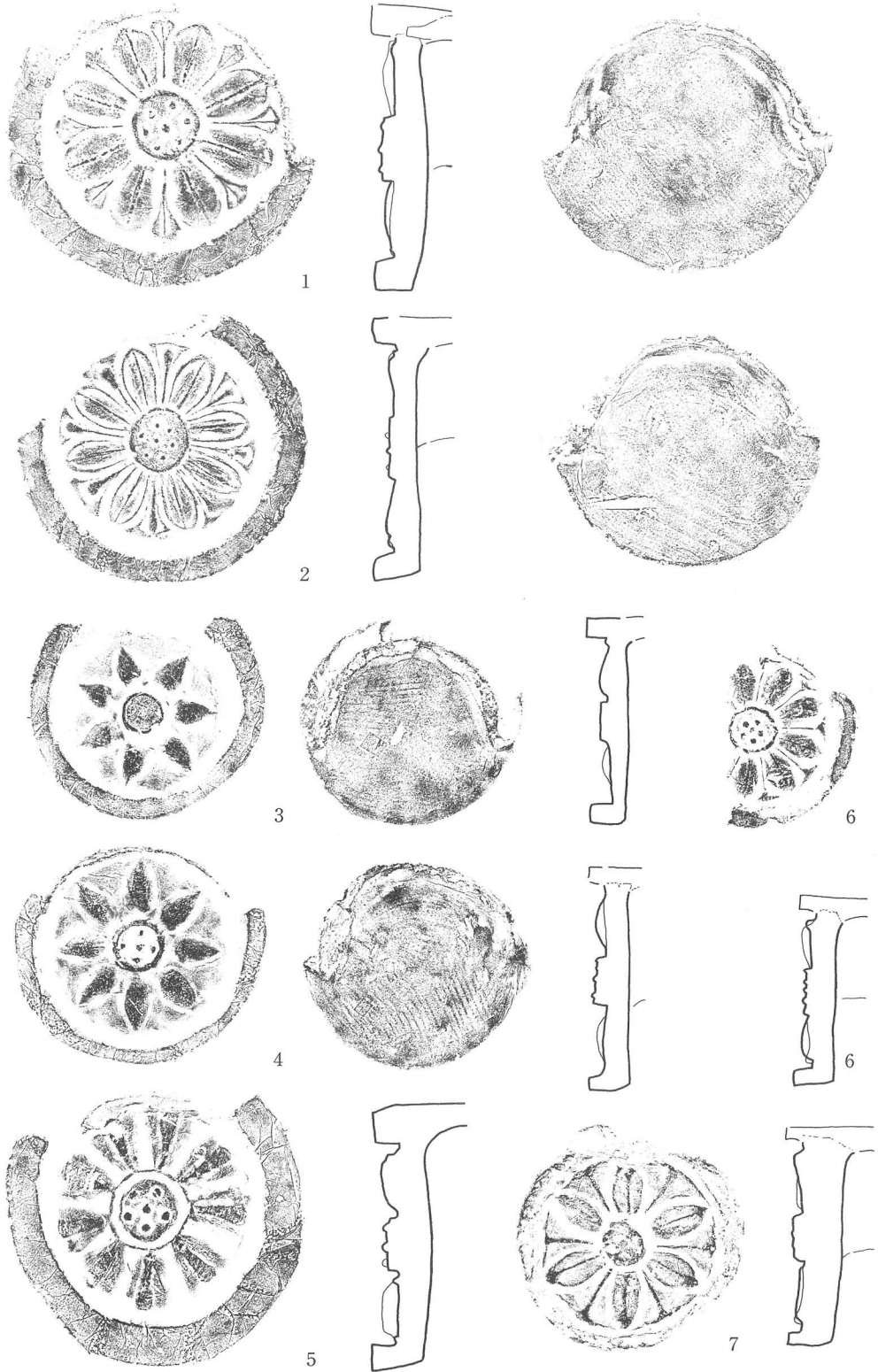
軒丸瓦では、単弁6葉のもの（図30-1・5・6：第16図10・13・14）が芬皇寺などで出土しており、これが円筒桶による平瓦に伴ない、単弁8葉のものが模骨桶による平瓦に伴なうものではないかと思われる。

C. 京都檜原廢寺の軒瓦

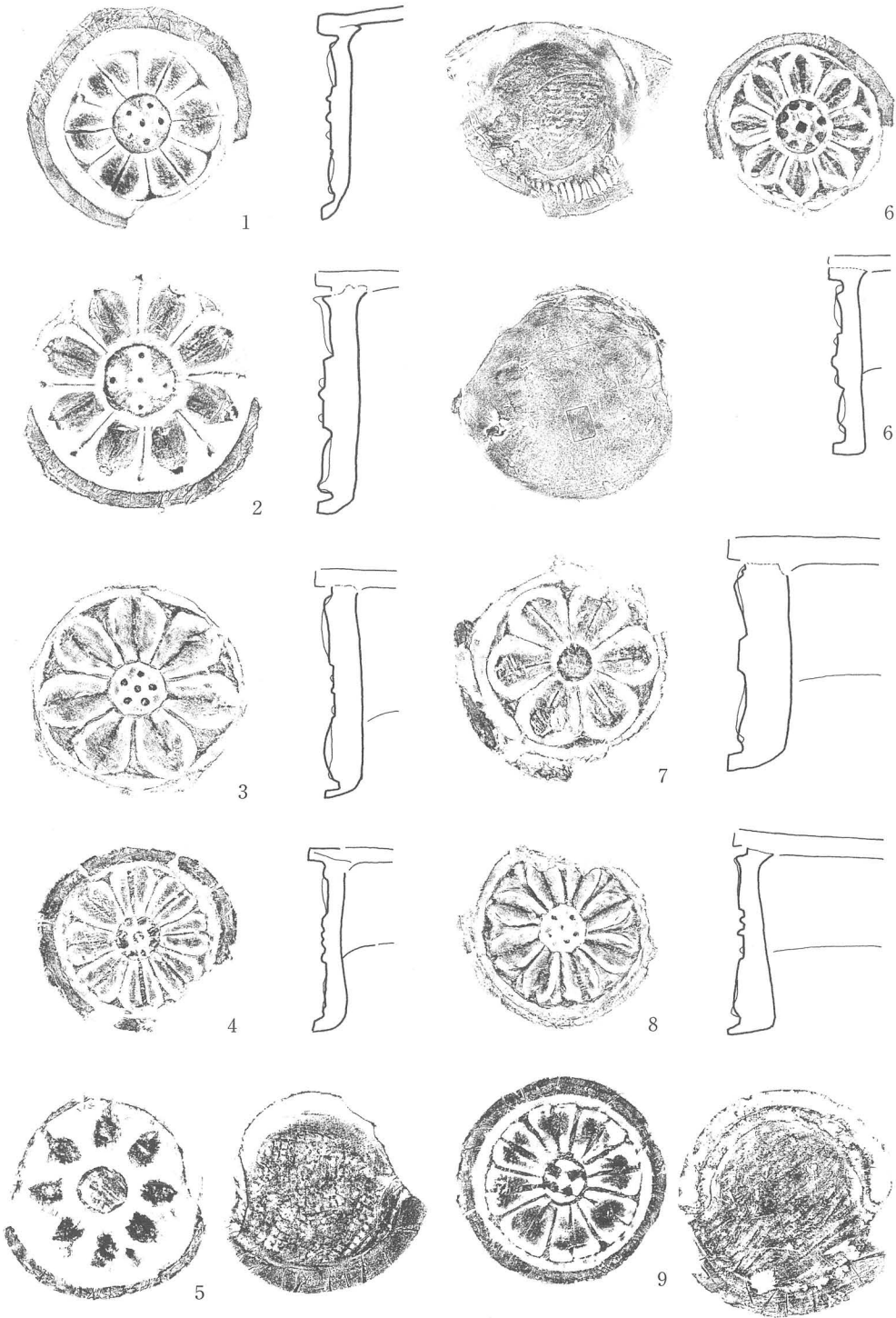
檜原廢寺は京都市西京区檜原に所在する。檜原廢寺出土の軒丸瓦は重弁蓮華文でⅠ類と



第13図 新羅の軒丸瓦 (1:5)
皇龍寺 (1~3) 新羅王京 (4~6)



第14図 新羅の軒丸瓦 (1:5)
皇龍寺 (1~5) 新羅王京 (6・7)



第15図 新羅の軒丸瓦 (1:5)

皇龍寺 (1・2) 新羅王京 (3・4・6~8) 芬皇寺 (5・9)

Ⅱ類に分類できる^{69・70・71}。Ⅰ類軒丸瓦は文様が立体的で、直線顎の素文軒平瓦と組む。Ⅱ類軒丸瓦は蓮弁・子葉が線表現で、顎部に押し引きの2条の弧線を施す段顎の素文軒平瓦と組む。

椈原廃寺の軒瓦は新羅との直接的な関係において充分理解できるものであり、それは次の理由による。

i) 軒丸瓦文様の類似性

先述の仁旺洞遺跡第28図-4の軒丸瓦(第18図4)は中央に稜線をもち、間弁が独立する点で椈原廃寺の軒丸瓦に類似する。椈原廃寺は重弁であるのに対し、仁旺洞例は中央に稜線を有する単弁であるが、瓦当の基盤面・基底面が平坦で、その上に隆起した蓮弁・間弁・中房が個々に配されるなどの要素は共通している。

ii) 軒丸瓦の瓦当裏面の叩き文

椈原廃寺軒丸瓦Ⅰ類(第18図2)・Ⅱ類(第18図3)には瓦当裏面に格子叩きを有する。仁旺洞遺跡の軒丸瓦には瓦当裏面の叩きはないが、皇龍寺の軒丸瓦においては、Ⅲ期前半(590~620)には瓦当裏面に平行叩き文、Ⅲ期後半(620~633)では少数例に平行叩き文があり、Ⅳ期(634~660)の芬皇寺では格子叩き文がある。瓦当裏面の叩き文は、新羅と全く共通する要素である。

iii) 瓦当と丸瓦の接合

椈原廃寺の軒丸瓦は瓦当裏面最上部に接合用の段を作り、丸瓦と接合している。新羅瓦は古新羅段階では丸瓦先端は瓦当筈にまで達するものが多いが、皇龍寺図245-⑥軒丸瓦(第14図1:Ⅲ期前半)など接合用の段を作るものも、少数だが存在している。

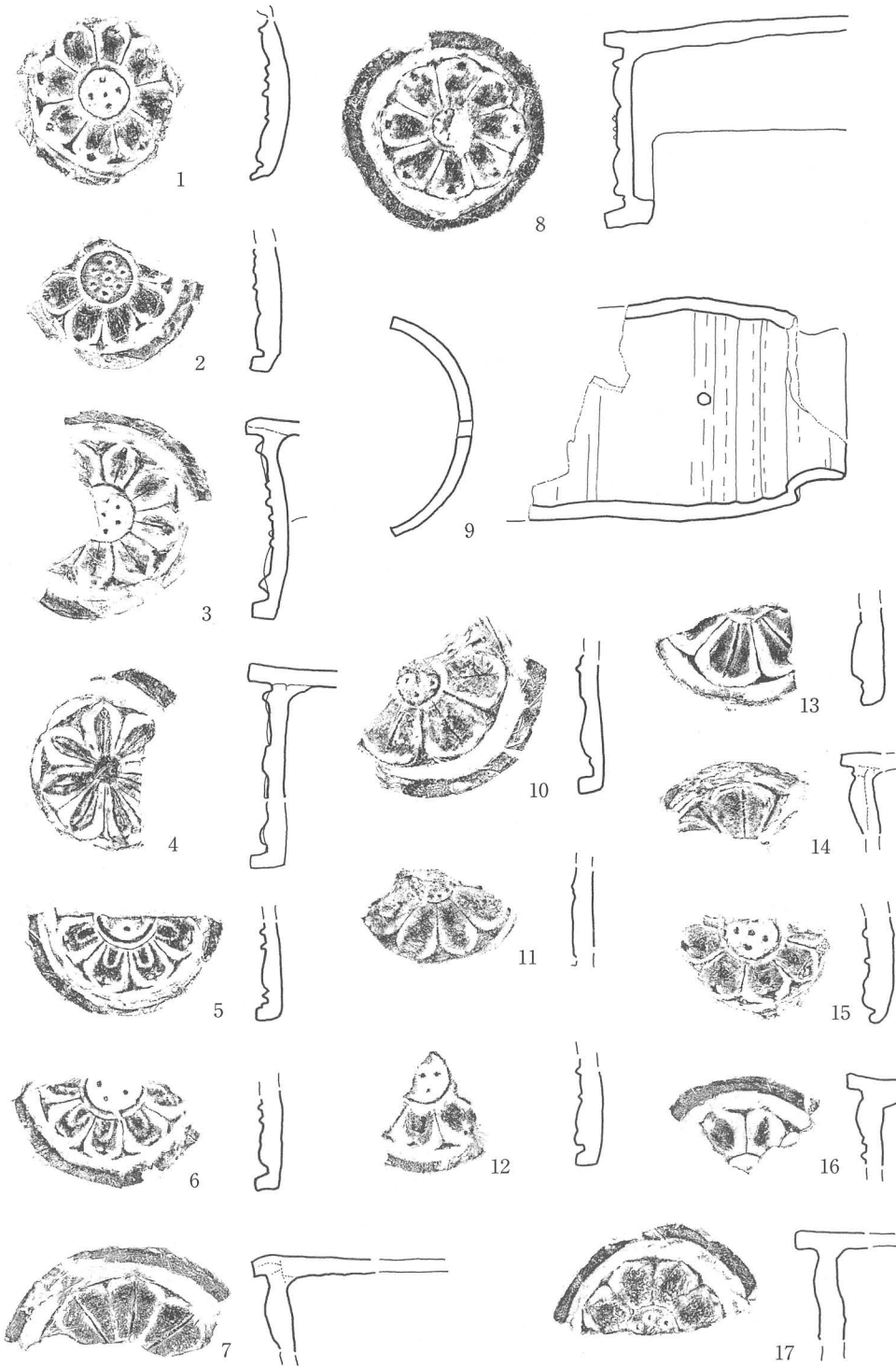
iv) 軒平瓦顎部の文様

椈原廃寺Ⅰ類軒丸瓦と直線顎の素文軒平瓦の組み合わせの年代は、重弧文軒平瓦が出現してはいるが、畿内においてもなお普遍的な波及を示していない時期である650年頃、即ち7世紀中葉としてよいと思う。

一方、椈原廃寺Ⅱ類軒丸瓦と顎部に押し引きの2条の弧線を施す段顎の軒平瓦は、押し引き重弧文軒平瓦が広く普及した時期のものであり、670年代から680年代と考えてよいと思う。この時期の新羅では、統一新羅の寺院である四天王寺(679年創建)、感恩寺(682年創建)が造営された。椈原廃寺軒平瓦の顎部に型引きの刻線と軒丸瓦と同一の瓦筈の文様を押すものは、顎部文様を施す統一新羅瓦の影響と考えてよいであろう。

v) 椈原廃寺の平瓦・軒平瓦は模骨桶巻作りであるが、新羅でも仁旺洞遺跡で模骨桶巻作りが用いられたことが明らかになった。

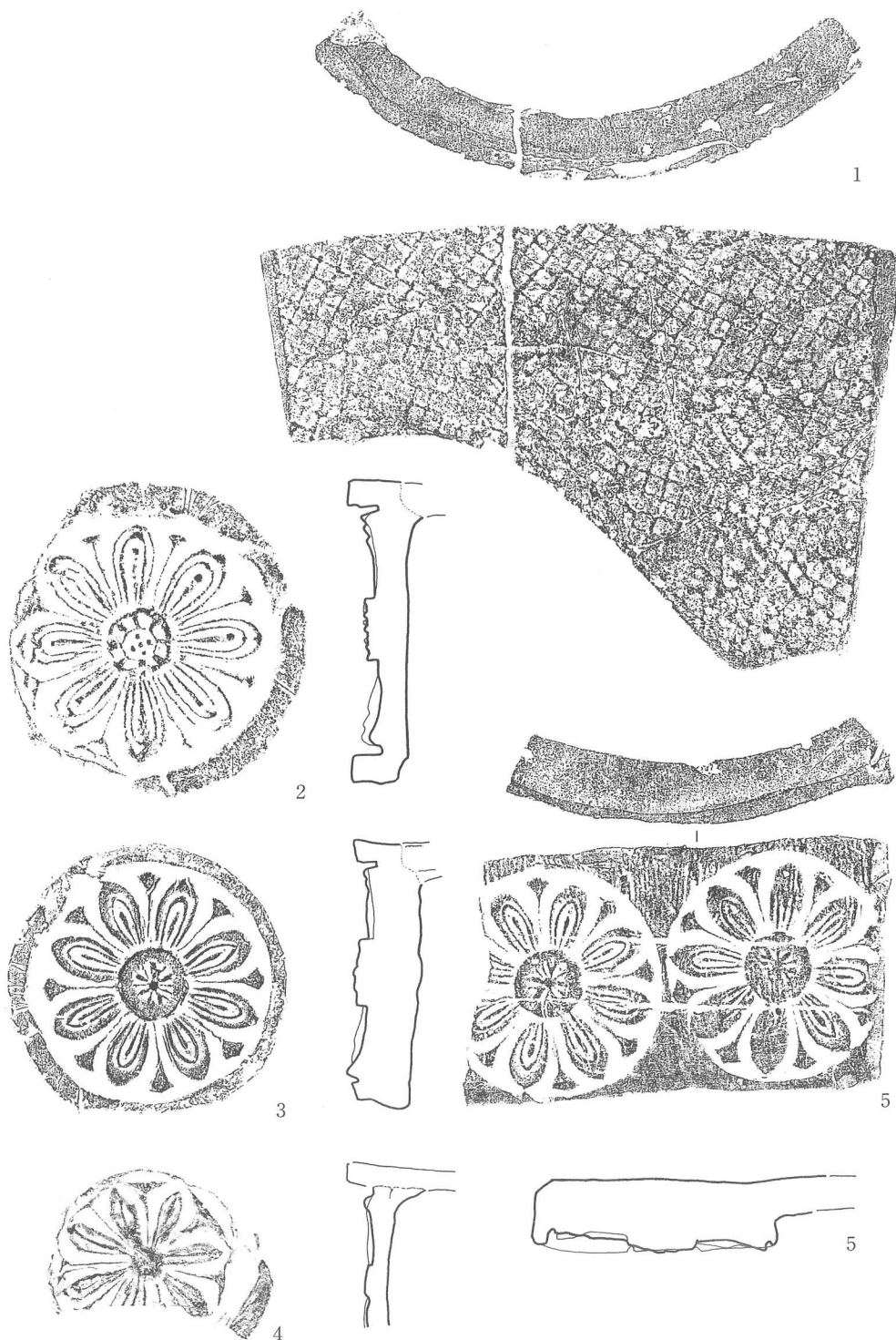
以上からみると、粘土素材としての糸切り、丸瓦の行基葺、平瓦模骨桶巻作り、軒丸瓦文様、瓦当と丸瓦の接合、瓦当裏面の叩き、軒平瓦における顎部文様など新羅瓦と密接な関係があることは明らかである。



第16図 仁旺洞556・566番地遺跡2建物址出土の瓦（1：5）



第17図 仁旺洞556・566番地遺跡2建物址出土の平瓦 (1:5)



第18図 檜原廃寺の軒瓦と仁旺洞遺跡の軒瓦 (1 : 4)
檜原廃寺 (1~3・5) 仁旺洞遺跡 (4)

5. おわりに

大化改新前夜に日本に来朝した百済王子豊璋^{ほうしょう}とは、皇極元年（642）四月の、「大使翹岐、其の従者を将て朝に拝す」の翹岐^{げうき}と同一人物であるという、西本昌弘氏の説⁷²に私は従う。同じく皇極元年九月紀の「天皇、大臣に詔して曰はく、「朕、大寺を起し造らむと思欲ふ。近江と越との丁を発せ」とのたまふ。百済大寺ぞ。」の記事と対比して考える時、これらは一連の動きの中にあつた可能性は高いであろう。

即ち、百済義慈王は、642年の7月・8月に新羅領に侵入し、旧伽倻諸国を占領した。同年7月、高句麗に対して百済は共同作戦を要請した。これより3ヶ月前に、百済王子豊璋＝翹岐を日本に質として送り込んだ。「質」とは王の身代りのことで、外交関係における共同作戦を要請するものである。

このような状況のもとで日本は9月に百済大寺の造営を始める。わが国における天皇勅願の最初の寺院の名が「百済大寺」というのは、この特殊な状況のもとで、はじめて理解できることだと思ふ。この百済大寺造営には、旧来からの百済からの渡来氏族である倭漢氏・書直縣を造営長官として造営し、この寺院は天皇の客分としての百済王氏のための寺院であつたと考えられる。この寺院の軒瓦製作に、法隆寺用の型押し具を再使用したことは、法隆寺もまた百済との関係がきわめて密接であつたことを物語るものである。

そして豊璋と共に来日した弟の善光は、「摂津百済寺」「摂津百済尼寺」と一体の場所である「難波に居」たのであり、百済滅亡後は、日本国内における百済国の王として居たものと考えられる。この時期においても、「摂津百済寺」と法隆寺との間で、軒平瓦に同範関係があることは、法隆寺と百済との関係がいかに深いかを物語るものである。そして各地に波及した法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦もまた、倭漢氏を中心とする百済人と密接な関係をもって、瓦当文様と製作技法が波及していったと考えられる。

一方、紀伊上野廃寺式軒平瓦は瓦当文様・製作技法の両面において新羅と密接な関係にあつた。天武朝における『日本書紀』での新羅からの来日記事は11回に及んでおり、天智末年から天武朝における日本の瓦にあらわれた新羅的要素は十分に考慮されてよいものである。また、檜原廃寺の瓦においては、650年頃と、670年から680年頃までの二回にわたって新羅との関係を有する瓦があつたことを示しているのである。

ところで、これまで日本の瓦の研究の中で高句麗的と呼ばれてきたものは、少しも高句麗的ではない。高句麗的とは、粘土紐桶巻作り、瓦当裏面の丸瓦接合のための刻み、瓦当面の中房の突出と蓮弁の盛り上がりの三条件を満たすものを言うべきである。湖東式軒瓦はこの三条件を満たすものと考えられる。

註

- 1 山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、同期舎出版、1983年。
- 2 奈良文化財研究所『飛鳥白鳳の瓦づくりⅥ－川原寺式軒瓦の成立と展開（1）』2003年。
- 3 奈良文化財研究所『飛鳥白鳳の瓦づくりⅦ－川原寺式軒瓦の成立と展開（2）』2004年。
- 4 奈良文化財研究所『飛鳥白鳳の瓦づくりⅧ－法隆寺式軒瓦の成立と展開』2005年。
- 5 奈良文化財研究所『飛鳥白鳳の瓦づくりⅨ－雷文縁・幅線文縁・重圏文縁の複弁蓮華文軒丸瓦の展開－』2006年。
- 6 奈良文化財研究所『飛鳥白鳳の瓦づくりⅩ－重弁蓮華文軒丸瓦の展開－』2007年。
- 7 亀田修一「中国・四国地方の法隆寺式軒瓦」『天平の宇佐－宇佐虚空蔵寺と古代仏教』1996年。
- 8 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝 瓦』昭和資財帳第15巻、小学館、1992年。
- 9 奈良県立橿原考古学研究所『平隆寺』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第47冊、1984年。
- 10 近江俊秀「山村麿寺式軒瓦の分布とその意味」『研究紀要』第8集、由良大和古文化研究協会、2004年。
- 11 小野市教育委員会『播磨大寺遺跡Ⅰ 昭和46年度発掘調査報告』1972年。
- 12 大谷輝彦「飭磨、神前、揖保郡東部の古代寺院」『第3回播磨考古学研究集会の記録』2003年。
- 13 井内古文化研究室『東播磨古代瓦聚成』1990年。
- 14 加西市教育委員会『吸谷麿寺』1992年。
- 15 藤井直正「讃岐国古代寺院跡の研究」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』1983年。
- 16 平田政彦「斑鳩とその周辺の法隆寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅧ』2005年。
- 17 西田 弘「手原麿寺」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会、1989年。
- 18 岡田 玄『岡田栄吉追悼誌 三楽館瓦譜』1977年。
- 19 大阪市文化財協会『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』1996年。
- 20 芦屋市教育委員会『芦屋麿寺址』芦屋市文化財調査報告7、1970年。
- 21 高知県教育委員会『比江麿寺跡発掘調査概報』1991年。
- 22 藤澤一夫「律令制下の氏族と寺院」『茨木市史』1969年。
- 23 八尾市文化財調査研究会『洪川麿寺（第2次調査・第3次調査）』2004年。
- 24 真野和夫「豊前の法隆寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅧ』2005年。
- 25 石田茂作「法隆寺式忍冬唐草文宇瓦の分布」『伽藍論考』、養徳社、1948年。
- 26 続群書類従完成会『続々群書類従』第17、1978年。
- 27 飛鳥資料館『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』1976年。
- 28 藤澤一夫「撰津百濟寺考」『日本のなかの朝鮮文化』2、朝鮮文化社、1969年。
- 29 上田陸・近藤康司「撰河泉の法隆寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅧ』2005年。
- 30 平子鐸嶺「法隆寺草創考」『仏教芸術の研究』金港堂、1914年。
- 31 利光三津夫「百濟亡命政權考」『律令制とその周辺』慶應義塾大学法学会叢書17、1967年。
- 32 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 本文篇』吉川弘文館、1962年。
- 33 続群書類従完成会『群書類従』第5、1930年。
- 34 続群書類従完成会『続群書類従』第8上、1927年。
- 35 河合町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『長林寺』1990年。
- 36 大西貴夫「平隆寺と長林寺の法隆寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅧ』2005年。
- 37 西田 弘「益須寺跡」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会、1989年。
- 38 小笠原好彦「福林寺跡」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会、1989年。

- 39 滋賀県野洲郡教育会『野洲郡史』上巻、1927年。
- 40 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 考證篇 第五』1983年。
- 41 李永植「古代人名からみた「呉」」『日本歴史』第502号、1990年3月号。
- 42 藤井直正「讃岐国古代寺院跡の研究」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』1983年。
- 43 和歌山県教育委員会『上野廃寺跡発掘調査報告書』1986年。
- 44 梅原末治「伯耆伊勢崎村の廃寺址と其古瓦」『宝雲』第五冊、宝雲舎、1933年。
- 45 山崎信二『平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』1994年（『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、2003年、所収）。
- 46 安藤精一他『和歌山県の地名』日本歴史地名体系31、平凡社、1983年。
- 47 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 考證篇 第六』1983年。
- 48 三品彰英『日本書紀朝鮮関係記事考証』上巻、吉川弘文館、1962年。
- 49 文化公報部文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書』1978年。
- 50 国立慶州文化財研究所『新羅王京』2002年。
- 51 黄寿永「百濟帝釈寺考」『百濟文化と飛鳥文化』吉川弘文館、1978年。
- 52 鄭永鎬『中原塔坪里寺址発掘調査報告書』韓国教員大学校博物館學術調査報告第7輯、1993年。
- 53 小笠原好彦「湖東式軒丸瓦の成立年代と系譜」『近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論文集、2001年。
- 54 軽部慈恩「公州出土の百濟系古瓦に就いて」『考古学雑誌』第22巻第8号、1932年。
- 55 重岡 卓「「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察」『紀要』第10号、滋賀県文化財保護協会、1997年。
- 56 北村圭弘・下田真里子「華寺遺跡の屋瓦－近江の古代寺院研究の基礎資料8－」『北近江』第2号、北近江古代史研究会、2005年。
- 57 長寺（A・B）と湖東（A・BⅠ・BⅡ・CⅠ）の細分名は、註55の重岡論文による。
- 58 瓦当裏面の拓本は、註55の重岡論文に掲載されている。
- 59 大脇 潔「老北京胡同薈紀行－東アジアにおける軒平瓦の変遷－」『古代摂河泉寺院論叢集』第2集、2005年。
- 60 奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺』中国社会科学院考古研究所発掘報告、奈良国立文化財研究所史料第47冊、1998年。
- 61 俞偉超「鄴城調査記」『考古』1963年第一期。
- 62 河北省臨漳県文物保管所「鄴城調査和鑽探簡報」『中原文物』1983年第四期。
- 63 万雄飛・白宝玉「朝陽古城北大街で出土した3～6世紀の蓮華文瓦当の基礎的研究」『東アジア考古学論叢』日本奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古研究所、2006年。
- 64 文化財管理局・文化財研究所『皇龍寺』1984年。
- 65 国立慶州文化財研究所『芬皇寺Ⅰ』2005年。
- 66 皇龍寺について、李興範の『韓国古代伽藍の形成と展開の研究』（山喜房仏書林、2003年）を参考にした。
- 67 崔兌先『平瓦製作法 의 變遷에 대한 研究』慶北大学校文学碩学位論文、1993年。
- 68 国立慶州文化財研究所『慶州仁旺洞556・566番地遺蹟発掘調査報告書』2003年。
- 69 佐藤興治「榎原廃寺発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、1967年。
- 70 杉山信三・佐藤興治「榎原廃寺の発掘調査」『仏教芸術』66号、1967年。
- 71 林正憲・垣内拓郎「榎原廃寺の出土瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりX』2007年。
- 72 西本昌弘「豊璋と翹岐－大化改新前夜の倭国と百濟－」『ヒストリア』第107号、1985年。

7世紀 後半의 기와로 본 朝鮮三國과 日本의 關係

山崎信二 (야마자키 신지)

요 지 본 논문의 요점은 일본의 7세기대 기와는 백제와의 관계가 강한데, 특히 法隆寺의 기와에 있어 백제인과의 관계가 강했음을 지적할 수 있다는 점이다. 또한 7세기 중엽에 백제 왕자가 일본으로 건너오면서 百濟大寺의 조영이 진행되고 그 전에 백제에서 건너온 倭漢氏의 支族이었던 사람들이 백제왕족을 중심으로 집중적으로 거주하기 시작하였다는 점이다. 백제 멸망 후에 백제 왕자를 難波에 두고 일본 국내에서의 百濟國의 왕으로 삼았는데, 이는 法隆寺와 밀접한 관계가 있다. 法隆寺式 忍冬唐草文 암막새를 분류하고 편년하면 이 기와가 출토되는 대부분의 사찰이 백제인과의 관계를 지적할 수 있다. 한편, 7세기말에 일본에서 보이는 암막새 가운데 紀伊上野廢寺나 伯耆齋尾廢寺 등에서 확인되는 독특한 인동문을 사용한 암막새가 있는데, 이 암막새들은 包舍式이라는 신라적인 제작기법을 가지고 있으며, 주로 7세기에 신라에서 일본으로 건너온 사람들의 절에서 사용되었음을 지적하였다. 또한 6, 7세기 신라 암막새의 편년작업을 시행하고 檜原廢寺의 기와 속에서 650년 경과 670년부터 680년 경까지 두 번에 걸쳐서 신라와 연관되는 기와가 이용된 점에 언급하였다. 마지막으로 고구려적이라고 할 수 있는 것으로 湖東式 수막새수막새에 대해 언급하면서 점토띠 와통 제작 (粘土紐桶卷作り), 수막새 뒷면에 보이는 수키와 접합용의 각선, 그리고 와당면 中房과 연판돌출상황에 주목하여 湖東式 막새기와를 제작한 사람들은 고구려에서의 망명자들이었음을 지적하였다.

키워드 : 法隆寺式 忍冬唐草文 암막새와 百濟, 紀伊上野廢寺式 忍冬唐草文 암막새와 新羅, 湖東式 막새기와와 高句麗

Interaction of Roof Tiles between the Three Kingdoms of Korea and Japan in the Late 7th Century

Yamazaki Shinji

Abstract : In this paper I explore the interaction of roof tiles between the Three Kingdoms of Korea and Japan in the late 7th century. Close connection between the roof tiles of Baekje and Japan is observed in the 7th century, especially in the Horyuji temple (法隆寺). In the middle of 7th century, the prince of Baekje moved to Japan, and the construction of the Kudara-no-Ohtera temple (百濟大寺) started, and the tribes of Yamato-no-Aya (倭漢氏) that were old immigrants from Baekje came together to settle around the residence of the royal family of Baekje. In the wake of the fall of Baekje, Japan government post the Baekje prince to the Naniwa palace as the king of the refugee government of Baekje. The Horyuji temple played the major part in this event. An analysis of the flat eave tiles of the Horyuji temple type with palmetto scroll design reveals that the almost all of the temples having this type of the roof tiles bear some relation to the tribes from Baekje. In the later part of 7th century, the distinctive type of flat eave tile with palmetto design appeared in the Kii Ueno Haiji temple (紀伊上野麿寺) and the Houki Sainou Haiji temple (伯耆齋尾麿寺). This was made by the roll-up technique of Silla. This type of roof tile was adopted mainly in the temples established by the immigrants from Silla in the 7th century. The analysis of the round eave tiles of Silla reveals that the Silla style roof tiles were introduced twice in the periods of AD 650 and AD 670-680 in the Kashihara Haiji (橿原麿寺). The analysis of the round and flat eave tiles in the Kotou type (湖東式) reveals that they were made by the refugee tribes from Goguryeo for their characteristics such as the clay coils-bucket molding technique, the notches in the rear side of round eave tile to attach the tail part, and the projection of thalamus and prominence of petals in the lotus design of round eave tile.

Keywords : Baekje and the eave tiles of the Horyuji temple (法隆寺) type with palmetto scroll design, Silla and the eave tiles of the Kii Ueno Haiji temple (紀伊上野麿寺) type with palmetto scroll, Goguryeo and the roof tiles of the Kotou type (湖東式)